資料５

＜別冊　資料編＞

データで見る丹波地域---------- 1

地域ビジョンの評価検証---------- 3

アンケートの結果---------- 15

新地域ビジョン策定にかかる検討の状況---------- 27

ビジョンを語る会の開催実績---------- 32

丹波の森づくり 30 年を振り返る---------- 未

丹波地域ビジョン委員のこれまでの活動---------- 34

2050 年を描く未来ストーリー---------- 38

丹波の森宣言・丹波の森構想---------- 49

当初地域ビジョン「みんなで丹波の森」---------- 51

改定地域ビジョン「みんなで丹波の森」---------- 53

データで見る丹波地域

（１） 人口

（表１）丹波地域の人口

区　分	国勢調査 H27.10		国勢調査 R2.10		推計人口 R3.10	
	人	世帯	人	世帯	人	世帯
兵 庫 県	5,534,800	2,315,200	5,465,002	2,402,484	5,432,560	2,413,953
丹波地域	106,150	38,131	101,082	38,638	99,744	38,702
丹波篠山市	41,490	15,578	39,611	15,605	39,070	15,635
丹波市	64,660	22,553	61,471	23,033	60,674	23,067

資料：総務省統計局「国勢調査報告」、兵庫県「推計人口」

（表２）令和2年の国勢調査結果による丹波地域の年齢区分別人口構成

区　分			平成 27 年 A	令和 2 年（構成比%） B		差引増減 B－A	増減率 %
丹波地域		0～14 歳	13,242	11,903	(11.9)	△ 1,339	△ 10.1
		15～64 歳	58,257	52,662	(52.7)	△5,595	△ 9.6
		65 歳以上	34,322	35,397	(35.4)	1,075	3.1
内訳	丹波篠山市	0～14 歳	4,890	4,470	(11.5)	△ 420	△ 8.6
		15～64 歳	22,896	20,427	(52.7)	△ 2,469	△ 10.8
		65 歳以上	13,420	13,862	(35.7)	442	3.3
	丹波市	0～14 歳	8,352	7,433	(12.1)	△ 919	△ 11.0
		15～64 歳	35,361	32,235	(52.7)	△ 3,126	△ 8.8
		65 歳以上	20,902	21,535	(35.2)	633	3.0

資料：総務省統計局「国勢調査報告」

（２） 産業

（表３）丹波地域の総生産額の産業別構成比　（R3.6時点）

区　分		総生産額	第１次	第２次	第３次	輸入品に課される税・関税等
全　県	億円 (%)	212,106 (100.0)	1,044 (0.5)	59,037 (27.8)	150,820 (71.1)	1,205 (0.6)
	R1/H30 増加率	0.2	▲4.3	1.0	▲0.1	—
丹波地域	億円 (%)	4,328 (100.0)	71 (1.6)	1,818 (42.0)	2,415 (55.8)	24 (0.6)
	R1/H30 増加率	9.9	▲3.5	27.0	0.2	—
全県に対する割合		2.0%	6.8%	3.1%	1.6%	

※市町内総生産＝(第１次産業＋第２次産業＋第３次産業)＋輸入品に課される税・関税等

資料：企画県民部統計課「平成31・令和元年度市町内総生産（速報値）」

（３）農業

（表４）丹波地域の農業の主要指標

区　　分	農家戸数	農業従事者数	耕地面積	
			田	畑
全　　県	67,124 戸	87,029 人	43,167 ha	2,948 ha
丹波地域	8,214 戸	11,847 人	6,335 ha	458 ha
全県に対する割合	12.2 %	13.6 %	14.7 %	15.5 %

資料：２０２０年度農林業センサス農林業経営体調査結果の概要（兵庫県分）

（表５）技術力のある企業例

区　　分	業　　種	特　　色　　等
共栄樹脂(株)	プラスチックシート等製造	各種食品容器等に成型加工される樹脂シート製造が国内屈指の総合樹脂メーカー。ポリプロピレンシートの国内トップシェア。
(株)大地農園	ﾌﾟﾘｻﾞｰﾌﾞﾄﾞﾌﾗﾜｰ、ﾄﾞﾗｲﾌﾗﾜｰ製造	プリザーブドフラワー製造は世界の大手４社のうちの１社。プリザーブドフラワー等国内シェア約 50%以上。
住友ゴム工業(株)	ゴルフボール製造	国内シェア 25%以上。特許も多数保有。
明昌機工(株)	ナノテク機器等の受注生産	大阪大学や兵庫県立大学との共同開発により、県立粒子線医療センターの加速器系設計製作など、ナノテクの個別受注生産を展開。
平和発條(株)	伸縮両効き皿ばねユニット	地震時に建物の揺れを最小限に抑制する制震ダンパーの構造改良部品を開発、製造。

（４）　労働

（表６）年別地元就職率の推移（高校生）

区　分	30 年春	31 年春	令和 2 年春	令和 3 年春
地元就職/全就職者数	97 人/186 人 (52.2%)	117 人/213 人 (54.9%)	81 人/184 人 (44.0%)	126 人/200 人 (63.0%)

（５）社会基盤

（表７）丹波地域の道路整備状況（県管理分）　　令和3年4月1日現在

区　分	一般国道（県管理分）			県　　道			合　　計		
	実延長 m	改良率 %	舗装率 %	実延長 m	改良率 %	舗装率 %	実延長 m	改良率 %	舗装率 %
全　　県①	878,032	96.4	100.0	3,961,811	79.9	94.5	4,839,843	82.9	95.5
丹波地域② (②/①)	122,821 (14.0%)	94.4	100.0	401,462 (10.1%)	72.5	93.2	524,283 (10.8%)	77.6	94.8

地域ビジョンの評価

○ 改定ビジョン（2011 年度策定：目標年次：2020 年）では、**5 つの将来像（『自立』、『交流』、『元気』、『絆』、『安全・安心』）**を掲げています（改定ビジョンでは、当初ビジョンの将来像の基本的方向を継承していますが、内容・表現については見直しを行なっています）

○ 策定後、5 つの将来像の達成状況を把握するため、将来像に関連する指標（客観指標 74 項目、主観指標 54 項目等）を設定し、毎年度フォローアップに努めてきました。2011 年(平成 23 年)度に改訂ビジョンを策定したことから、その前年である 2010 年(平成 22 年)度を指標の基準年（度）とし、最新年（度）の数値を比較することで評価をしています。

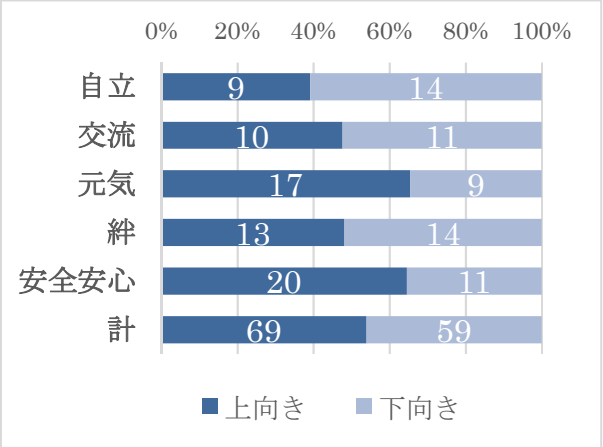
○ 新ビジョンの策定過程では、「丹波新ビジョン検討委員会」での議論のほか、「ビジョンを語る会」、「丹波地域夢会議」等の開催や「丹波地域の今とこれからに関するアンケート」の実施などを通じて、将来像の実現状況について、丹波地域内外の方から多数ご意見を伺いました。こうして集めたデータや意見にもとづき、以下に５つの将来像の達成状況の検証結果をとりまとめています

最新年（令和３）度の指標の評価

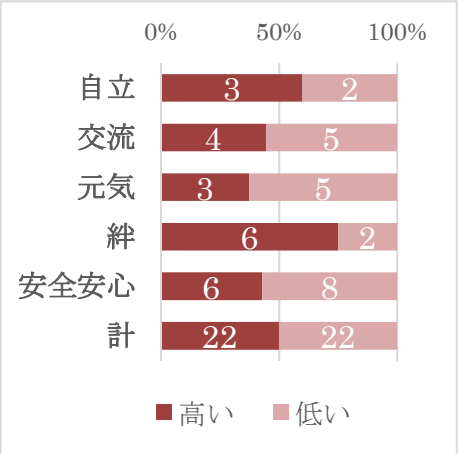
○全体では、128 項目のうち 69 項目（54%）が基準年に比べて上向きの数値を示しているものの、コロナ禍の影響を大きく受け、イベント等の中止・規模縮小により昨年度より大幅に数値が低下した項目も見られました。各将来像で見ると、特に「自立」「交流」の指標においてその傾向が顕著でした。

○全県値との比較が可能な 44 項目中では、22 項目（50%）が全県より高い数値を示しています。昨年（令和２）度が 26 項目（64%）であったことを踏まえると、全体としては低調な傾向となった一方、将来像「絆」の指標においては県下トップレベルの値を示す項目が多く見られ、コロナ禍においても、丹波地域の”絆”の強さが示されました。

基準年(平成 22 年(度))との比較
［客観指標・主観指標］



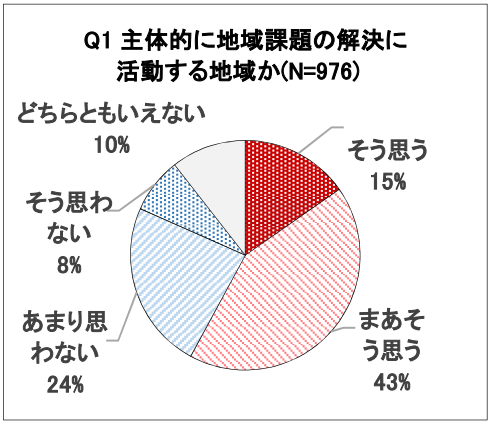
全県値との比較
［主観指標のみ］

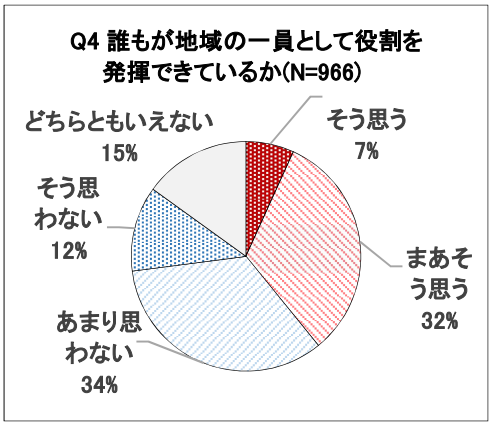


将来像１：みんなで創る“自立のたんば”
－地域の魅力発掘と情報発信、地域を担う人材の育成
　地域づくりへの住民参加の推進、地域で活動する団体の連携推進

【指標の評価：基準年と最新年の比較】

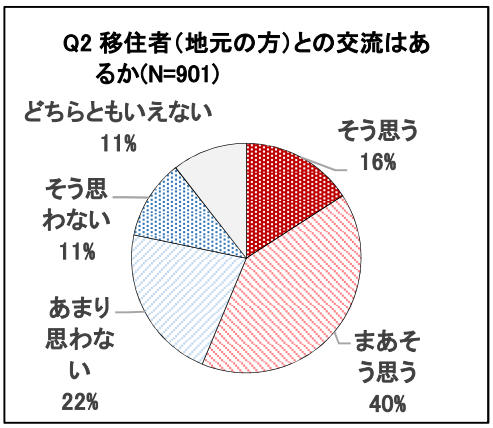
◇基準年より大きく向上している項目
・国・県指重要文化財の数　[146 件　→　163 件]
・NPO 法人数　[43 団体　→　68 団体]
・「ひょうごアドプト」の団体数　[18 団体　→　28 団体]
◇基準年より大きく低下している項目
・地域の自治会や地域で活動している団体に活気があると感じる
　[43.5%　→　23.5%]
・地域づくりの担い手が育っていると感じる　[32.8%　→　20.5%]
【検証結果】
・**住んでいる地域に誇りや愛着を感じる人**は増加傾向にあります（H22：47.4%→R3：64.7%）。**地域活動への参加率**（R3:43.8%）が県下（平均：32.9%）で最も高く、**NPO 等**（H22：43 団体→R3：68 団体）による住民の自主的な地域活動が活発に行われ、地域住民が**地域課題の解決に主体的に活動する地域**だと思う人が半数以上を占めています（ｱﾝｹｰﾄ Q1）
・しかし、人口減少・高齢化とともに、**ボランティア登録者数**（H22：7,147 人→R2：4,122 人）などは減少傾向にあり、今後の地域づくりの担い手不足を懸念する声もあがっています。また、**自治会等の活動**が縮小するなど、地域社会の活力低下が懸念されています（自治会等に活気があると感じている人の割合：H25：43.5%→R3：23.5%）。
・一方で、**誰もが地域の一員として役割を発揮できている**とみる人は多くありません（ｱﾝｹｰﾄ Q4）。地域づくりの潜在的な担い手はまだいると考えてよいかもしれません

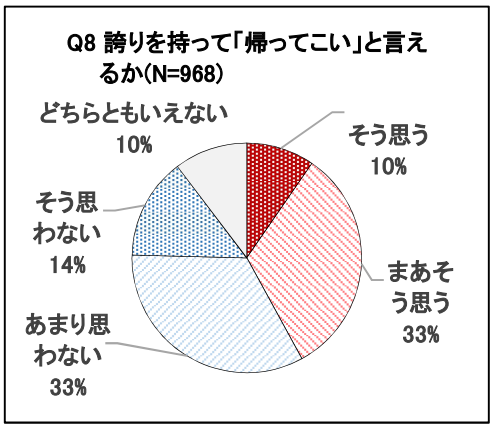




将来像２：都会に近い田舎を楽しむ“交流のたんば”
－森・川・里の豊かな自然の保全と活用、環境に優しい地域づくりの推進、
環境学習フィールドづくり、美しい景観づくりの推進、
都市との多彩な交流の推進、丹波の田舎暮らし情報の発信

【指標の評価：基準年と最新年の比較】
◇基準年より大きく向上している項目
・恐竜化石関連施設への来訪者数　[48,767 人　→　115,360 人]
・田舎暮らし相談者数　[327 人　→　1,106 人]
・田舎暮らし体験施設の利用者数　[2 人　→　28 人]
・山林や川などの自然環境を守る取組に参加している
[24.4%　→　36.3%] (全県値 32.2%)
◇基準年より大きく低下している項目
・太陽光など「再生可能エネルギー」を利用する取組に参加している、または参加したいと思う人　[35.8%　→　21.6%] (全県値 24.8%)
・地域の自然環境は守られていると思う　[65.3%　→　55.9%] (全県値 47.5%)
・自然の生き物とふれあう機会があると思う　[58.0%　→　44.4%] (全県値 37.8%)
【検証結果】
・丹波の豊かな自然を守りたいという意識は徐々に広がりをみせ、**自然環境を守るための取り組みに参加**している人も増えています（H25:58%→R3:36.3%）
・丹波並木道公園などの県立公園や恐竜化石関連施設（H22:48,767 人→R2:115,360 人）への来客数が増えるなど、**交流人口**は増加しつつあります
・コロナ禍以降、自然とふれあえるたんば暮らしへの関心は一層高まり、恐竜化石等の地域資源を活かしたまちづくりが進むとともに、相談件数は急増し、**移住者数**（R2：220 人）も増加しています
・**移住者と地域の方の交流**（アンケート Q2）は進んでいますが、UJI ターンを含む移住者の受け入れ環境には改善の余地があるとの指摘があります。**誇りを持って「帰ってこい」といえる地域**だと思う人はまだ少数にとどまっています（アンケート Q8）





将来像３：やりがいを実感できる“元気なたんば”

－地域の産業をリードする農林業の振興、商店街の活性化・ものづくり産業の振興、丹波の魅力を活かしたツーリズムの推進、地域の資源を活かした「しごと」の創出、地域づくり活動・文化活動の推進、若者の就労促進

【指標の評価：基準年と最新年の比較】

◇基準年より大きく向上している項目

・栗新植面積　[4.5ha　→　30.0ha]

・新規就農者数　[26 人　→　61 人]

・観光などの訪問客が増えていると思う　[21.8%　→　33.8%] (全県値 14.9%)

・製造品出荷額等　[4,373 億円　→　5,364 億円]

・自分の仕事にやりがいを感じる　[57.7%　→　70.0%] (全県値 63.4%)

◇基準年より大きく低下している項目

・農林業（家庭菜園や里山体験などを含む）に魅力を感じる　[56.2%　→　42.7%]

・人に紹介したい観光資源があると思う人の割合　[65.1%　→　55.3%]

・商売、事業を新たに始めやすいと思う　[12.8%　→　8.8%] (全県値 10.4%)

【検証結果】

・この 10 年間で作付面積は減少し、耕作放棄地は増加していますが、**農林産業産出額**は増加しています。GDP に占めるシェアは低いですが、**農林業は丹波地域の活気に結び付く産業**と認識されています（ｱﾝｹｰﾄ Q6）。新規就農者数も増加しています（H22:26 人→R3:61 人）

・**製造品出荷額、商業年間販売額**とも堅調に推移しています

・観光面では、**入込客数、消費額**とも伸びています。地域の人も訪問客の増加を実感し、**宿泊業、飲食業が地域に活気をもたらしている**と感じています

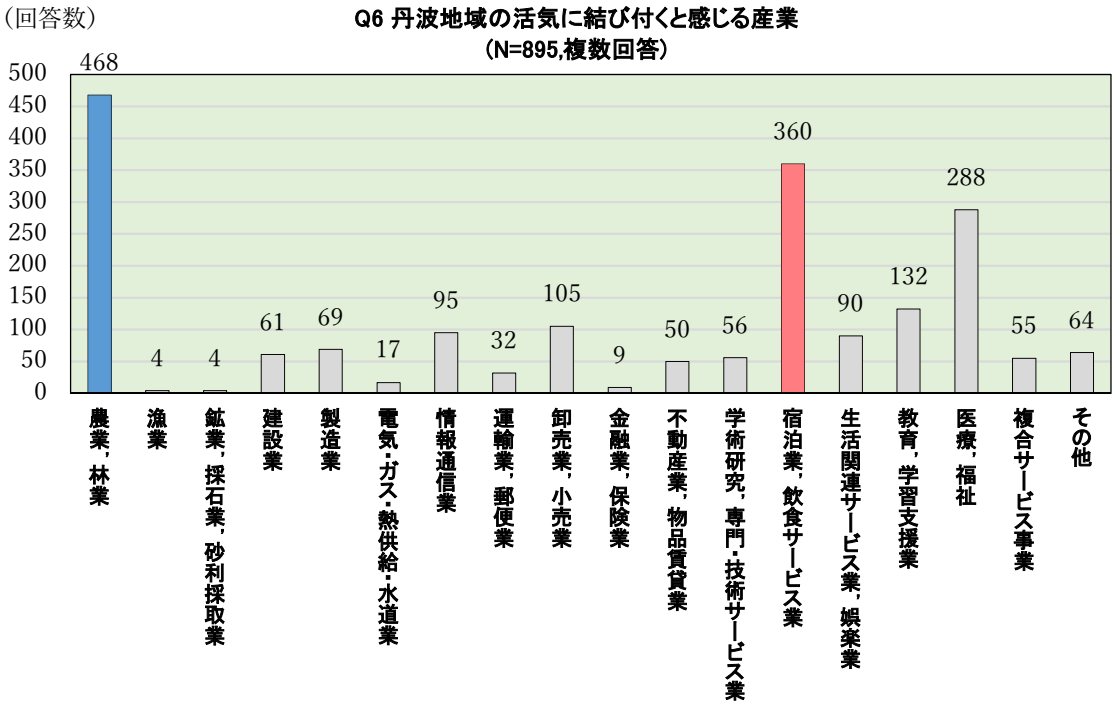
・「しごと」の面では、**自分の仕事にやりがいを感じる**人が全県と比較しても高い反面（R3:70%＞全県平均 63.4%）、**就職・転職・起業しやすい環境**が整っているとみる人は少数（R3：7.4%）にとどまっています

・**住んでいるまちや地元企業に活気がある**と思う人は県下平均を下回っています（R3:21.6%＜全県平均 26.6%）

表 主要経済指標の変化

項目	基準値※1		直近値		変化	
域内総生産	2011年度	338,378 百万円	2019年度	432,836 百万円	27.9%	⇧
農林産業産出額	2010 年	12,590 百万円	2018 年	13,537 百万円	7.5%	⇧
製造品出荷額等※2	2009 年	437,329 百万円	2019 年	546,399 百万円	24.9%	⇧
商業年間販売額	2006 年	162,204 百万円	2014 年	172,665 百万円	6.4%	⇧
観光入込客数	2010年度	4,417 千人	2019年度	5,072 千人	14.8%	⇧
観光消費額	2010年度	329 億円	2019年度	424 億円	28.9%	⇧

※1　改定ビジョン策定年（2011 年）の直近値。年（年度）は調査年（年度）ではなく実績年（年度）
※2　従業者 4 人以上の事業所
（出典：市町民経済計算、農林水産業センサス、工業統計、商業統計、観光動態調査）



将来像４：多世代が支え合う“絆のたんば”

－地域コミュニティの再生、地域ぐるみでの子育て推進、高齢者が安心して暮らせる地域づくり、高齢者が活躍できる地域づくり

【指標の評価：基準年と最新年の比較】

◇基準年より大きく向上している項目

・ファミリーサポートセンター会員数　[485 人　→　566 人]

・放課後児童クラブ数　[25 箇所　→　33 箇所]

・心の豊かさを育む教育や活動が行われていると思う
[39.3%　→　44.9%]（全県値 35.4%）

・異なる世代の人とつきあいがある　[55.7%　→　68.4%]（全県値 49.3%）

・これからも住み続けたいと思う　[61.0%　→　76.5%]（全県値 75.9%）

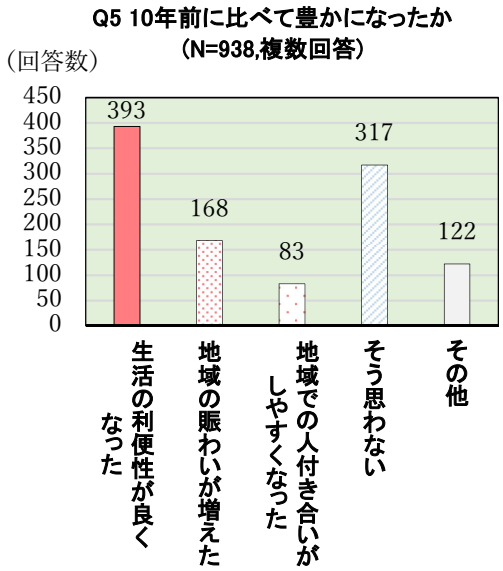
◇基準年より大きく低下している項目
・小規模集落数　[29 箇所　→　107 箇所]
・子育てがしやすいと思う　[52.7%　→　47.9%] (全県値 58.8%)
・老人クラブ数　[273 クラブ　→　132 クラブ]
・高齢者の知恵や経験が積極的に活用されていると思う　[31.4%　→　18.1%]

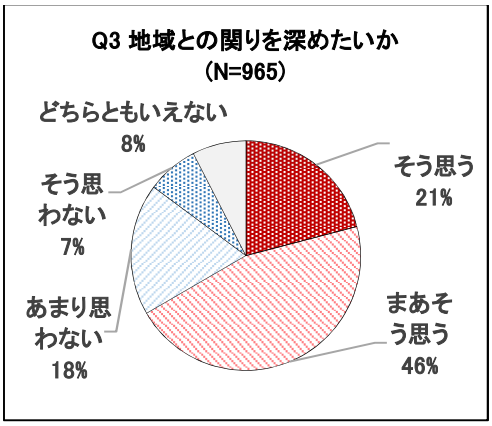
【検証結果】

・住んでいる地域で「**頼りになる知り合いが近所にいる**」(R3:71.1%＞県下平均 62.4%)、「**異なる世代の人との付き合いがある**」(R3:68.4%＞49.3%) と回答する人の割合が県下でも高く、地域内のつながり、信頼が強い地域であるといえます

・一方、そのつながりが地域での**子育てのしやすさ**につながっているかというと、必ずしもそうとはいえないのが現状です (子育てしやすいと思う人の割合－R3:47.9%＜県下平均 58.8%)

・小規模集落 (高齢化率 40%以上かつ 50 世帯以下の集落) が増加する中、**高齢者の暮らしやすさ**も、都市部に比べあまり高く評価されていません (高齢者にも暮らしやすいと思う人の割合－R3:43.7%＜県下平均 54.2%)。高齢者の知恵や経験が積極的に活用されていると感じる人の割合もあまり高くありません





<u>将来像５：ともに暮らす“安全安心なたんば”</u>
－災害に強く、犯罪のない地域づくりの推進、
誰もが暮らしやすいユニバーサル社会の実現、障害のある人も外国人も共に暮らす地域社会の実現、医療や健康、食の安全が確保された安心な地域の実現、

【指標の評価：基準年と最新年の比較】
◇基準年より大きく向上している項目
・交通事故死傷者数　[656 人　→　257 人]
・街頭犯罪・侵入犯罪認知件数　[598 件　→　372 件]

・人口 10 万人あたりの医師数　[165.7 人　→　206.1 人]
・かかりつけの医者がいる　[69.1%　→　75.3%] (全県値 69.7%)
・心身ともに健康であると感じる　[58.2%　→　63.4%] (全県値 67.1%)
・災害に備えた話し合いや訓練に参加している
　[34.0%　→　37.8%] (全県値 21.5%)
・地域の災害に対する備えは、以前より確かなものになっていると思う
　[31.7%　→　39.2%]（全県値 34.4%）
・若者が希望を持てる社会だと思う　[4.9%　→　10.5%] (全県値 11.5%)
◇基準年より大きく低下している項目
・医療機関の適切な受診を心がけている　[88.2%　→　80.5%]
【検証結果】
・**犯罪認知件数**（H22：598 件→R2：372 件）や**交通事故死傷者数**（H22：656 人→R2：257 人）は減少傾向にあります。「**治安が良く安心して暮らせる**と思う人の割合」（R3：85%）は県下平均（79.6%）を上回っています
・防災面では、防災訓練や防災リーダー養成講座への参加者や住宅再建共済制度への加入者が増えるなど、**防災意識**が高まってきていることがうかがえます
・**だれもが暮らしやすいユニバーサル社会**の実現という点では、**移動・交通の利便性**への評価が低い（公共交通は便利だと思う人の割合－R3：12.2%）こともあり、達成されたとみる人は少数にとどまっています（R3：25.8%）
・県立丹波医療センターの開設、医師（かかりつけ医）を持つ人の増加などにより、**健康・地域医療**への安心感は高まっています。健康と感じる人も増えています（H22：58.2%→R3：63.4%）

■将来像ごとの客観指標・主観指標

客観指標数７４・主観指標数５４　　合計１２８

（１）自立（将来像１）

客観指標数１５・主観指標数８　　合計２３

基本項目		指標 名称等	指標の内容	【基準年】平成22年(度)	平成23年(度)	平成24年(度)	平成25年(度)	平成26年(度)	平成27年(度)	平成28年(度)	平成29年(度)	平成30年(度)	令和元年(度)	令和2年(度)	令和3年(度)※1	基準年と最新年の比較※2	全県値との比較(R3 主観指標) 全県値	評価※3	出典
①魅力あふれる「地域資源」	客観	国・県指定重要文化財の数	丹波地域にある国・県指定重要文化財の数	22年度 146件	146件	147件	147件	154件	156件	157件	162件	162件	162件	163件		↗			県教委調査
		恐竜化石関連施設への来訪者数	恐竜化石発掘現場・丹波竜化石工房ちーたんの館・元気村かみくげ・丹波並木道中央公園・太古のいきもの館への来訪者数	22年度 48,767人	59,571人	59,608人	74,679人	76,950人	97,782人	104,275人	114,303人	113,296人	118,935人	115,360人		↗			県調査
	主観	住んでいる地域に誇りや愛着を感じる人の割合		22年度 47.4%	57.8%	46.8%	62.7%	66.2%	67.1%	63.0%	68.9%	68.8%	69.2%	68.2%	64.7%	↗	66.8%	▼	県民意識調査
		住んでいる地域には、自慢したい「宝」(風景や産物、文化など)があると思う人の割合		22年度 51.7%	63.1%	49.3%	50.8%	53.9%	51.3%	50.9%	55.4%	53.4%	52.6%	57.1%	45.6%	↘	54.3%	▼	県民意識調査
		地域資源を生かしたビジネスや地域づくりが進んでいると思う人の割合		－	－	－	20.3%	17.0%	16.3%	20.2%	20.4%	20.3%	18.8%	18.8%	15.0%	↘			県民意識調査(丹波)
②地域を担う「人材」	客観	社協ボランティアセンターへの登録・活動把握者数	市のボランティアセンターへの登録者の数及び活動把握ボランティアの数	22年度 7,147人	7,197人	8,123人	－	3,149人	6,226人	6,211人	6,226人	5,229人	4,503人	4,122人		↘			県内社協活動の現況
		丹波の森大学受講者数	丹波の森構想を実現するための学習の場（大学）で受講した人の数	22年度 86人	81人	76人	50人	50人	46人	53人	51人	49人	43人	33人		↘			丹波の森公苑調査
		関西学院大学柏原スタジオにおけるフィールドワーク参加者	関西学院大学柏原スタジオでフィールドワークによる地域の調査・交流活動等に参加した人の数	22年度 248人	278人	323人	233人	259人	288人	272人	274人	176人	244人	160人		↘			県調査
		地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」参加事業所数	中学２年生を対象とした地域での社会体験活動に参加した事業者数	22年度 445社	488社	448社	473社	438社	438社	464社	407社	447社	385社	(*)8人		↘			県教委調査
		地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」参加ボランティア数	中学２年生を対象とした地域での社会体験活動に参加したボランティア数	22年度 637人	769人	700人	872人	757人	618人	567人	595人	524人	534人	(*)85人		↘			県教委調査
		地域に活かす「トライやる」アクションの参加生徒数	休日や長期休業中等に、中学生が地域に貢献する活動に参加した生徒数	22年度 809人	1,192人	1,184人	1,545人	1,380人	1,306人	988人	1,390人	1,095人	904人	(*)665人		↘			県教委調査
	主観	住んでいる地域をより良くしたり、盛り上げたりする活動に参加している人の割合		－	－	－	43.5%	46.0%	45.4%	46.1%	47.8%	49.0%	49.4%	50.0%	43.8%	↗	32.9%	☺	県民意識調査
		ボランティアなどで社会のためになる活動をしている、又はしてみたい人の割合		22年度 39.5%	45.2%	42.3%	32.7%	47.4%	44.7%	40.1%	45.1%	42.3%	40.7%	42.2%	35.2%	↘	32.6%	☺	県民意識調査
		住んでいる地域のことに関心がある人の割合		－	－	－	67.3%	79.6%	76.7%	72.2%	74.7%	74.4%	68.6%	71.8%	71.8%	↗	71.2%	☺	県民意識調査
		地域づくりの担い手が育っていると感じる人の割合		－	－	－	32.8%	27.8%	23.9%	23.5%	23.6%	25.1%	18.3%	21.5%	20.5%	↘			県民意識調査(丹波)
③地域で活動する「団体」	客観	ＮＰＯ法人数	認証を受けた特定非営利活動法人の数	22年度 43団体	45団体	51団体	55団体	58団体	60団体	64団体	65団体	68団体	67団体	68団体		↗			県調査
		社会福祉協議会登録ボランティア団体数	市のボランティアセンターが把握しているボランティア団体の数	22年度 373団体	306団体	335団体	－	298団体	242団体	280団体	242団体	246団体	232団体	212団体		↘			県内社協活動の現況
		学生等による地域貢献活動推進事業の実施団体数	地域と連携して自主的な地域貢献活動を実施している学生等のグループの数	—	－	4団体	4団体	4団体	8団体	8団体	8団体	10団体	7団体	8団体		↗			県調査
		県民まちなみ緑化事業の実施団体数	県民緑税を活用した植樹や芝生化などの緑化活動を行う事業を実施している住民団体等の数	22年度 5団体	4団体	6団体	14団体	11団体	10団体	12団体	11団体	11団体	9団体	10団体		↗			県調査
		緑化資材提供事業等の実施団体数	花壇づくりなどに必要な緑化資材を提供する事業を活用しているグループの数	22年度 67団体	75団体	80団体	60団体	53団体	48団体	55団体	55団体	47団体	61団体	56団体		↘			県調査
		「ひょうごアドプト」の団体数	県管理の道路や河川においてボランティアで清掃美化活動を行う合意書を県と締結した団体の数	22年度 18団体	21団体	24団体	25団体	25団体	30団体	29団体	34団体	31団体	28団体	28団体		↗			県調査
		丹波の森公苑生活創造グループ登録数	丹波の森公苑へ登録した主体的な各種活動を行うグループの数	22年度 205団体	232団体	255団体	272団体	284団体	120団体	144団体	158団体	171団体	191団体	199団体		↘			丹波の森公苑調査
	主観	地域の自治会や地域で活動している団体に活気があると感じる人の割合		－	－	－	43.5%	41.3%	37.8%	41.3%	32.4%	39.2%	37.1%	30.1%	23.5%	↘			県民意識調査(丹波)

※1：主観指標（令和3年）について、県下地域別で最高値のものは網掛、最低値のものは白抜きで表示
※2：基準年と最新年の比較は、平成22年度（統計結果が無い場合はその直近年度）と最新年度を比較し、向上を「↗」、低下を「↘」で表示。ただし、1%未満の変動は「→」で表示。
※3：全県値との比較は丹波地域の値が全県値より上位のものは「☺」、下位のものは「▼」で表示
＊印の欄については、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業規模の縮小による大幅な数値の減少や、事業の中止があった。

（２）交流（将来像２）　　客観指標数１０・主観指標数１１　　合計２１

基本項目	指標			【基準年】	平成23年（度）	平成24年（度）	平成25年（度）	平成26年（度）	平成27年（度）	平成28年（度）	平成29年（度）	平成30年（度）	令和元年（度）	令和2年（度）	令和3年（度）※1	基準年と最新年の比較※2	全県値との比較（R3 主観指標）		出典
		名称等	指標の内容	平成22年(度)													全県値	評価※3	
①特色豊かな「自然・環境」	客観	二酸化窒素（ＮＯ２）濃度（日平均値の年間９８％値）	窒素酸化物（大気汚染物質）の一種である二酸化窒素の濃度（１年間のうち濃度が高かった日に着目）	22年度 0.011ppm	0.010ppm	0.010ppm	0.011ppm	0.010ppm	0.010ppm	0.009ppm	0.010ppm	0.010ppm	0.009ppm	0.008ppm		↗			県調査
	客観	浮遊粒子状物質濃度（日平均値の２％除外値）（ＳＰＭ）	物の燃焼等に伴い発生する煤塵等の粉砕や自動車の走行に伴って飛散する粉塵など大気中に浮遊する粒径10μm以下の粒子状物質の濃度（１年間のうち濃度が高かった日に着目）	22年度 0.046mg/㎥	0.041mg/㎥	0.051mg/㎥	0.051mg/㎥	0.052mg/㎥	0.043mg/㎥	0.045mg/㎥	0.044mg/㎥	0.054mg/㎥	0.043mg/㎥	0.045mg/㎥		↗			県調査
	客観	河川ＢＯＤ（生物化学的酸素要求量）の７５％値	河川での有機物による水質汚濁の指標の年間測定結果が環境基準に適合しているどうか評価するもの	22年度 0.9mg/L	1.8mg/L	1.2mg/L	0.7mg/L	0.6mg/L	0.5mg/L	<0.5mg/L	0.6mg/L	<0.5mg/L	0.5mg/L	0.7mg/L		↗			県調査
	客観	生活排水処理率	下水道や農業集落排水・コミュニティプラント・浄化槽などによる生活排水の処理率	22年度 98.9%	98.9%	99.2%	99.2%	99.2%	99.3%	99.3%	99.3%	99.4%	99.5%	99.5%		↗			県調査
	主観	ごみの分別やリサイクルに協力している人の割合		22年度 92.6%	95.4%	95.1%	94.5%	91.9%	95.4%	93.5%	91.7%	90.7%	91.3%	93.5%	88.8%	↘	91.7%	▼	県民意識調査
	主観	日頃から節電に取組んでいる人の割合		22年度 83.9%	88.1%	85.4%	84.4%	83.0%	82.0%	81.3%	80.3%	78.6%	76.1%	81.8%	76.6%	↘	73.8%	☺	県民意識調査
	主観	製品を購入する際に、環境に配慮したものを選んでいる人の割合		22年度 62.6%	65.2%	57.9%	65.3%	65.1%	64.6%	60.7%	59.6%	60.3%	53.9%	58.3%	50.7%	↘	53.8%	▼	県民意識調査
	主観	住んでいる市・町の自然環境は守られていると思う人の割合		22年度 65.3%	74.2%	70.7%	67.7%	54.1%	52.1%	48.7%	57.3%	56.2%	50.4%	57.1%	55.9%	↘	47.5%	☺	県民意識調査
	主観	住んでいる地域のまち並みはきれいだと思う人の割合		－	－	－	55.3%	60.8%	51.9%	54.9%	60.1%	65.9%	61.6%	62.6%	58.7%	↗	66.0%	▼	県民意識調査
	主観	山林や川、海などの自然環境を守るための取り組みに参加している人の割合		－	－	－	24.4%	31.8%	27.4%	35.7%	42.0%	35.2%	37.4%	39.8%	36.3%	↗	32.2%	☺	県民意識調査
	主観	太陽光など「再生可能エネルギー」を利用する取組に参加している、または参加したいと思う人の割合		22年度 35.8%	43.1%	35.0%	61.4%	35.7%	27.4%	26.8%	22.8%	18.6%	21.4%	25.6%	21.6%	↘	24.8%	▼	県民意識調査
②地域資源を活かした「学び・体験」	客観	環境学習の参加者数	恐竜・ほ乳類化石環境学習プログラムと丹波地域の森・川を活用した環境学習プログラムに参加した人の数	22年度 1,293人	1,779人	1,952人	2,394人	1,813人	1,539人	1,919人	1,675人	1,748人	1,752人	(*)233人		↘			県調査
	客観	恐竜化石関連施設への来訪者数	恐竜化石発掘現場・丹波竜化石工房ちーたんの館・元気村かみくげ・丹波並木道中央公園・太古のいきもの館への来訪者数	22年度 48,767人	59,571人	59,608人	74,679人	76,950人	97,782人	104,275人	114,303人	113,296人	118,935人	115,360人		↗			県調査
	主観	住んでいる市・町では、自然の生き物（動物・植物）とふれあう機会があると思う人の割合		－	－	－	58.0%	45.3%	49.6%	40.1%	46.5%	45.2%	40.6%	49.4%	44.4%	↘	37.8%	☺	県民意識調査
③都会に近い田舎を活かした「交流」	客観	楽農生活交流人口（交流施設利用者数）	ひょうご農林水産ビジョンに位置づけられている交流施設の利用人数	22年度 1,733千人	1,675千人	1,846千人	1,804千人	1,082千人	1,766千人	1,749千人	1,780千人	1,760千人	1,726千人	1,429千人		↘			県調査
	客観	企業の森・里づくりにおける集落と企業の協定数	里山での間伐・枝打ち、交流会等を連携して行うため、集落と都市部の企業等が締結した協定の数	22年度 5地区	6地区	6地区	5地区	5地区	4地区	3地区	3地区	4地区	3地区	3地区		↘			県調査
	客観	田舎暮らし相談者数	丹波市及び丹波篠山市で実施している田舎暮らし案内に係る相談者数	－	－	－	327人	373人	439人	558人	559人	751人	699件	1,106件		↗			県等調査
	客観	田舎暮らし体験施設の利用者数	空き民家活用による田舎暮らし推進モデル事業で整備した田舎暮らし体験施設の利用人数	－	－	2人	51人	52人	47人	33人	56人	29人	23人	28人		↗			県調査
	主観	住んでいる地域は、県内のどこへでも便利に移動できると思う人の割合		22年度 30.2%	29.7%	26.2%	35.2%	38.8%	30.9%	31.0%	34.5%	36.7%	39.0%	36.3%	29.7%	↘	62.5%	▼	県民意識調査
	主観	Ｉターン者など、丹波地域以外の人を受け入れやすい環境だと感じる人の割合		－	－	－	33.0%	34.1%	36.0%	42.3%	33.8%	41.0%	36.2%	30.1%	34.1%	↗			県民意識調査（丹波）
	主観	丹波地域の魅力が地域の内外にうまく情報発信されていると思う人の割合		－	－	－	27.4%	30.0%	29.3%	26.8%	23.6%	24.7%	20.1%	21.1%	19.8%	↘			県民意識調査（丹波）

※1：主観指標（令和3年）について、県下地域別で最高値のものは網掛、最低値のものは白抜きで表示
※2：基準年と最新年の比較は、平成22年度（統計結果が無い場合はその直近年度）と最新年度を比較し、向上を「↗」、低下を「↘」で表示。ただし、1%未満の変動は「→」で表示。
※3：全県値との比較は丹波地域の値が全県値より上位のものは「☺」、下位のものは「▼」で表示
＊印の欄については、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業規模の縮小による大幅な数値の減少や、事業の中止があった。

（３）元気（将来像３）　　客観指標数１６・主観指標数１０　　合計２６

基本項目		指標 名称等	指標の内容	【基準年】平成22年(度)	平成23年(度)	平成24年(度)	平成25年(度)	平成26年(度)	平成27年(度)	平成28年(度)	平成29年(度)	平成30年(度)	令和元年(度)	令和2年(度)	令和3年(度)※1	基準年と最新年の比較※2	全県値との比較(R3 主観指標) 全県値	評価※3	出典
①地域をリードする「農林業」	客観	丹波黒大豆作付面積	丹波黒大豆の作付面積（市聞き取り）	22年度 720ha	703ha	710ha	734ha	750ha	737ha	696ha	733ha	660ha	664ha	640ha		↘			県調査
		丹波大納言小豆作付面積	丹波大納言小豆の作付面積（市聞き取り）	22年度 343ha	358ha	362ha	362ha	336ha	353ha	383ha	355ha	337ha	324ha	328ha		↘			県調査
		栗新植面積	栗を新たに植えた面積	－	4.5ha	12.5ha	18.2ha	20.4ha	21.7ha	23.8ha	26.8ha	28.7ha	29.7ha	30.0ha		↗			県調査
		新規就農者数	新たに就農した人の数	22年度 26人	30人	37人	25人	33人	40人	37人	30人	41人	33人	61人		↗			県調査
		丹波産素材生産量	丹波地域産の素材（丸太）の生産量（丸太の体積）	21年度 15千㎥	17千㎥	29千㎥	29千㎥	30千㎥	28千㎥	32千㎥	29千㎥	51千㎥	52千㎥	37千㎥		↗			県林業統計書
		ため池改修着手数	ため池の改修に着手した箇所の数	22年度 117箇所	117箇所	117箇所	119箇所	119箇所	120箇所	121箇所	123箇所	128箇所	129箇所	132箇所		↗			県調査
	主観	地元や県内でとれた農林水産物を買っている人の割合		22年度 69.1%	72.1%	66.5%	78.9%	76.4%	71.7%	71.9%	78.2%	73.9%	69.7%	74.3%	79.4%	↗	66.3%	☺	県民意識調査
		地元や県内の農林水産業に、活気が感じられると思う人の割合		－	－	－	16.6%	17.4%	16.5%	17.3%	17.8%	18.1%	17.2%	19.8%	19.0%	↗	22.5%	▼	県民意識調査
		農林業（家庭菜園や里山体験などを含む）に魅力を感じる人の割合		－	－	－	56.2%	52.5%	49.5%	43.2%	53.2%	46.7%	43.8%	43.0%	42.7%	↘			県民意識調査(丹波)
②多彩な魅力を活かした「ツーリズム」	客観	観光客入込数	期間内に丹波地域を訪れた観光客の数	22年度 4,416千人	4,467千人	4,638千人	4,319千人	4,304千人	4,455千人	4,482千人	4,655千人	4,683千人	5,072千人	3,634千人		↘			県調査
		観光消費額	観光客が支出した交通費、宿泊費、土産品費、飲食費等の合計（推計）	22年度 329億円	326億円	331億円	326億円	329億円	342億円	350億円	354億円	389億円	424億円			↗			観光客動態調査
	主観	住んでいる市・町に、観光などの訪問客が増えていると思う人の割合		22年度 21.8%	31.2%	26.3%	33.0%	39.8%	39.5%	30.0%	39.2%	34.8%	36.3%	36.3%	33.8%	↗	14.9%	☺	県民意識調査
		人に紹介したい観光資源（農産物、郷土料理、まち並み、自然、祭り、人情など）があると思う人の割合		－	－	－	65.1%	63.2%	65.8%	64.3%	64.4%	60.8%	58.9%	54.7%	55.3%	↘			県民意識調査(丹波)
③やりがいを感じる「しごと」	客観	高校生の地元就職率	就職した新規高卒者のうち、丹波地域内の事業所に就職した人の割合	22年春 57.9%	52.5%	50.9%	52.5%	51.7%	51.8%	49.0%	52.2%	54.9%	44.0%	63.0%		↗			県調査
		製造品出荷額等	製造品出荷額、製造工程から出たくず・廃物の出荷額、加工賃収入額及びその他収入額の合計	22年度 4,373億円	4,659億円	5,858億円	4,462億円	4,666億円	4,653億円	4,907億円	4,941億円	5,209億円	5,236億円	5,364億円		↗			工業統計調査
		商品販売額	年間の商品販売額（消費税を含む）	19年度 1,622億円	－	1,258億円	－	1,534億円	－	1,727億円	－	－	－			↗			商業統計調査
		有効求人倍率（原数値）	ハローワーク登録求職者（有効求職者数）に対し企業求人数（有効求人数）との割合を示す指標	22年度 0.59	0.71	0.75	0.85	1.04	1.21	1.33	1.52	1.62	1.55	0.95		↗			兵庫県の経済・雇用情勢
		就職フェアinたんば参加企業数	丹波地域の企業への就職面接会に参加した企業の数	22年度 35社	34社	35社	35社	34社	31社	36社	84社	79社	24社	(*)中止		↘			県調査
		就職フェアinたんば参加者数	丹波地域の企業への就職面接会に参加した人の数	22年度 224人	170人	178人	133人	112人	38人	28人	99人	53人	21人	(*)中止		↘			県調査
		企業紹介フェア参加企業数	高校生や大学生等向けの丹波地域の企業説明会に参加した企業の数	22年度 29社	29社	30社	31社	18社	26社	31社	31社	30社	32社	(*)中止		↗			県調査
		企業紹介フェア参加者数	高校生や大学生等向けの丹波地域の企業説明会に参加した人の数	22年度 95人	127人	119人	73人	29人	40人	33人	26人	9人	(*)中止	(*)中止		↘			県調査
	主観	自分のしごとにやりがいを感じる人の割合		22年度 57.7%	68.3%	63.1%	57.2%	70.7%	64.4%	66.8%	70.4%	73.1%	69.7%	62.4%	70.0%	↗	63.4%	☺	県民意識調査
		商売、事業を新たに始めやすいと思う人の割合		22年度 12.8%	18.5%	14.7%	14.9%	16.4%	13.4%	6.5%	6.7%	5.6%	8.4%	8.1%	8.8%	↘	10.4%	▼	県民意識調査
		自分にあった職業への就職や転職がしやすい社会だと思う人の割合		－	－	－	7.0%	6.1%	7.7%	6.5%	7.2%	6.4%	6.4%	6.1%	7.4%	↗	10.8%	▼	県民意識調査
		性別や年齢を問わず、働きやすい環境が整っていると思う人の割合		22年度 5.6%	12.7%	5.4%	9.4%	6.1%	9.3%	7.4%	8.0%	8.0%	8.4%	9.3%	9.8%	↗	12.5%	▼	県民意識調査
		住んでいる市・町の企業には活気が感じられると思う人の割合		－	－	－	17.8%	14.7%	17.5%	13.7%	17.7%	23.2%	20.7%	21.9%	21.6%	↗	26.6%	▼	県民意識調査

※1：主観指標（令和3年）について、県下地域別で最高値のものは網掛、最低値のものは白抜きで表示
※2：基準年と最新年の比較は、平成22年度（統計結果が無い場合はその直近年度）と最新年度を比較し、向上を「↗」、低下を「↘」で表示。ただし、1%未満の変動は「→」で表示。
※3：全県値との比較は丹波地域の値が全県値より上位のものは「☺」、下位のものは「▼」で表示
＊印の欄については、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業規模の縮小による大幅な数値の減少や、事業の中止があった。

（４）絆（将来像４）　　客観指標数１８・主観指標数９　　合計２７

基本項目	指標			【基準年】	平成23年（度）	平成24年（度）	平成25年（度）	平成26年（度）	平成27年（度）	平成28年（度）	平成29年（度）	平成30年（度）	令和元年（度）	令和2年（度）	令和3年（度）※1	基準年と最新年の比較※2	全県値との比較（R3 主観指標）		出典
		名称等	指標の内容	平成22年(度)													全県値	評価※3	
①つながりのある「地域・家庭」	客観	小規模集落数	高齢化率40%以上かつ50世帯以下の集落の数	22年9月末　29箇所	33箇所	45箇所	50箇所	57箇所	72箇所	84箇所	100箇所	108箇所	107箇所			↘			県調査
	客観	三世代同居世帯比率	三世代が同一住居に住んでいる世帯の割合	22年　16.7%	－	－	－	－	13.5%	－	－	－	－			↘			国勢調査
	主観	頼りになる知り合いが近所にいる人の割合		22年度　66.1%	75.1%	66.8%	71.5%	72.3%	73.1%	67.5%	70.4%	70.3%	74.4%	71.1%	71.1%	↗	62.4%	☺	県民意識調査
	主観	住んでいる地域で、異なる世代の人とつきあいがある人の割合		22年度　55.7%	62.1%	58.6%	67.7%	70.9%	71.7%	61.8%	65.4%	69.1%	71.9%	68.7%	68.4%	↗	49.3%	☺	県民意識調査
	主観	住んでいる地域にこれからも住み続けたい人の割合		22年度　61.0%	70.4%	62.8%	72.0%	78.2%	71.1%	65.4%	75.5%	71.7%	74.3%	69.0%	76.5%	↗	75.9%	☺	県民意識調査
	主観	家族とのコミュニケーションがとれている人の割合		－	－	－	89.4%	86.4%	87.0%	82.5%	86.5%	90.0%	89.0%	89.1%	90.2%	↗	90.2%	☺	県民意識調査
②地域ぐるみの「子育て」	客観	合計特殊出生率	一人の女性が一生に生む子どもの平均数	22年　1.60	－	－	－	－	1.54	－	－	－	－			↘			国勢調査
	客観	保育所等入所者数	保育所・幼保連携型認定こども園への入所者の数	22年10月　2,194人	2,152人	2,129人	2,234人	2,331人	2,527人	2,569人	2,568人	2,535人	2,552人			↗			県調査
	客観	ファミリーサポートセンター会員数	地域で子育て支援を受けたい人と行いたい人が相互に援助活動を行う会員組織の会員数	22年度　485人	515人	544人	546人	555人	534人	554人	553人	566人	572人	566人		↗			県調査
	客観	延長保育・休日保育実施箇所数	通常の保育時間を超えて保育を行ったり、日曜日・祝日に保育を行っている保育所の数	22年4月1日　14箇所	18箇所	18箇所	15箇所	26箇所	20箇所	19箇所	19箇所	21箇所				↗			県調査
	客観	放課後児童クラブ数	保護者が就労等し家庭にいない児童を、放課後、保護者に代わって保育する施設等の数	22年4月1日　25箇所	26箇所	27箇所	27箇所	28箇所	29箇所	33箇所	33箇所	34箇所	33箇所	33箇所		↗			県調査
	客観	まちの子育て広場開設数	子育て中の親子が気軽に集い、仲間づくりを通じ子育ての相談や情報交換等を行う場の数	22年度　54箇所	55箇所	55箇所	54箇所	51箇所	47箇所	47箇所	46箇所	49箇所	46箇所	46箇所		↘			県調査
	客観	子どもの冒険広場の利用者数	小学生等が自主性を持って自由に遊び生きる力を育むために設置した場を利用した人の数	22年度　1,276人	3,535人	6,217人	6,062人	2,349人	3,815人	4,219人	7,372人	5,468人	8,181人	8,481人		↗			県調査
	客観	若者ゆうゆう広場の利用者数	中・高校生等が気軽に集い交流するために設置した場を利用した人の数	22年度　3,900人	4,100人	4,891人	4,646人	5,183人	4,480人	3,433人	3,008人	2,854人	2,754人	1,601人		↘			県調査
	客観	子育て家庭応援推進員数	知事の委嘱を受け子育て家庭への見守りや声かけなどを行っている人の数	22年度　62人	62人	60人	60人	61人	61人	56人	56人	54人	46人	43人		↘			県調査
	客観	子育て応援締結企業数	地域の子育て家庭の応援や従業員の子育てと仕事の両立支援を進める協定を県と締結した企業等の数	22年度　51社	56社	61社	62社	61社	63社	64社	75社	72社	72社	72社		↗			県調査
	主観	住んでいる地域では、心の豊かさを育む教育や活動が行われていると思う人の割合		－	－	－	39.3%	49.8%	47.5%	36.7%	49.8%	46.9%	49.4%	45.6%	44.9%	↗	35.4%	☺	県民意識調査
	主観	住んでいる地域では、子育てがしやすいと思う人の割合		－	－	－	52.7%	52.6%	51.3%	38.4%	54.0%	46.6%	47.4%	50.6%	47.9%	↘	58.8%	▼	県民意識調査
	主観	住んでいる地域の子どもは、伸び伸びと育っていると思う人の割合		22年度　69.8%	75.4%	71.1%	71.4%	70.4%	68.9%	68.6%	72.2%	70.0%	73.7%	69.8%	68.2%	↘	64.3%	☺	県民意識調査
③安心して暮らせ、活躍の場がある「高齢者」	客観	老人医療対象人員	65歳以上70歳未満の人の疾病・負傷について医療保険給付後、公費助成の対象となった人の数	23年2月末　1,067人	413人	436人	422人	421人	421人	396人	390人	309人	228人			↘			社会福祉統計年報
	客観	要支援・要介護認定率	介護保険第1号被保険者数(65歳以上)のうち要支援・要介護認定を受けた人の比率	23年1月末　16.7%	17.3%	17.7%	18.3%	18.7%	19.0%	19.4%	19.0%	19.3%	19.5%	19.5%		↘			社会福祉統計年報
	客観	老人クラブ数	老人クラブの数	22年4月1日　273クラブ	270クラブ	261クラブ	255クラブ	232クラブ	220クラブ	219クラブ	196クラブ	205クラブ	145クラブ	132クラブ		↘			県調査
	客観	シルバー人材センター就業延べ人員	県内のシルバー人材センターで就業した会員の就業延べ人数	22年度　105,512人	104,721人	91,683人	93,719人	94,535人	131,501人	111,019人	109,683人	110,393人	107,188人	108,465人		↗			兵庫県シルバー人材センター協会調べ
	客観	高齢者の就業率	65歳以上の人口に占める就業者数の割合	22年　25.7%	－	－	－	－	29.2%	－	－	－	－			↗			国勢調査
	客観	丹波ＯＢ大学受講者数	高齢者の学習と交流機会、魅力ある地域社会の実践者を要請する大学で受講した人の数	22年度　181人	179人	211人	230人	245人	242人	225人	223人	201人	164人	128人		↘			丹波の森公苑調査
	主観	住んでいる地域は、高齢者にも暮らしやすいと思う人の割合		－	－	－	47.5%	40.9%	43.3%	35.7%	40.2%	39.3%	37.4%	43.2%	43.7%	↘	54.2%	▼	県民意識調査
	主観	高齢者の知恵や経験が積極的に活用されていると思う人の割合		－	－	－	31.4%	24.7%	23.4%	28.6%	25.5%	26.9%	23.2%	24.6%	18.1%	↘			県民意識調査（丹波）

※1：主観指標（令和3年）について、県下地域別で最高値のものは網掛、最低値のものは白抜きで表示
※2：基準年と最新年の比較は、平成22年度（統計結果が無い場合はその直近年度）と最新年度を比較し、向上を「↗」、低下を「↘」で表示。ただし、1%未満の変動は「→」で表示。
※3：全県値との比較は丹波地域の値が全県値より上位のものは「☺」、下位のものは「▼」で表示
＊印の欄については、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業規模の縮小による大幅な数値の減少や、事業の中止があった。

（５）安全安心（将来像５）　　客観指標数１５・主観指標数１６　　合計３１

基本項目		指標 名称等	指標 指標の内容	【基準年】 平成22年(度)	平成23年(度)	平成24年(度)	平成25年(度)	平成26年(度)	平成27年(度)	平成28年(度)	平成29年(度)	平成30年(度)	令和元年(度)	令和2年(度)	令和3年(度)※1	基準年と最新年の比較※2	全県値との比較(R3 主観指標) 全県値	評価※3	出典
①誰もが暮らしやすい「社会」	客観	就労移行支援事業者数、就労継続支援Ａ型・Ｂ型事業者数	障害のある人が就労に必要な知識・能力向上のために訓練等を行っている事業者の数	22年2月末 10箇所	13箇所	13箇所	13箇所	14箇所	15箇所	14箇所	17箇所	21箇所	22箇所	21箇所		↗			県調査
		女性の就業率	女性の15歳以上人口のうち、就業している人の割合	22年 47.6%	－	－	－	－	50.2%	－	－	－	－			↗			国勢調査
		自殺数	自殺をした人の数	22年 19人	31人	33人	28人	26人	15人	27人	20人	23人	25人	16人		↗			保健統計年報
		産業廃棄物の大規模不法投棄事案（投棄量）	産業廃棄物の不法投棄事案のうち１件当たりの投棄量が10トン以上の事案	22年度 318t	47t	234t	0t	0t	0t	0t	0t	0t	0t	0t		↗			県調査
		消費生活相談件数	市消費生活センターが受け付けた消費生活相談の件数	22年度 600件	623件	610件	769件	796件	680件	672件	567件	667件	580件	620件		↘			県調査
		交通事故死傷者数	車両等による事故で死亡・負傷した人の数	22年 656人	671人	719人	694人	598人	511人	519人	511人	402人	318人	257人		↗			県調査
		街頭犯罪・侵入犯罪認知件数	警察に認知された街頭犯罪・侵入犯罪の件数	22年 598件	497件	501件	477件	385件	427件	766件	554件	467件	446件	372件		↗			県調査
		男女共同参画社会づくり協定締結事業所数	男女共同参画の取組を進める協定を県と締結した事業所の数	22年度 63社	66社	70社	71社	72社	74社	76社	78社	81社	80社	80社		↗			県調査
	主観	住んでいる地域は買い物や通院に便利だと思う人の割合		22年度 39.7%	34.0%	30.6%	38.5%	37.7%	30.1%	33.0%	34.9%	31.0%	36.6%	43.0%	41.4%	↗	63.7%	▼	県民意識調査
		不当な差別がない社会だと思う人の割合		22年度 25.3%	30.6%	31.1%	49.7%	35.9%	31.2%	33.3%	37.9%	33.9%	32.3%	31.7%	26.8%	↗	23.3%	☺	県民意識調査
		住んでいる地域は、障害のある人にも暮らしやすいと思う人の割合		－	－	－	26.6%	26.0%	26.9%	23.0%	23.2%	23.3%	21.1%	29.9%	25.8%	↘	32.0%	▼	県民意識調査
		若者が希望を持てる社会だと思う人の割合		22年度 4.9%	4.4%	5.4%	11.3%	10.7%	10.1%	8.2%	11.6%	11.6%	13.2%	10.4%	10.5%	↗	11.5%	▼	県民意識調査
		住んでいる市・町の駅前や商店街に、活気が感じられると思う人の割合		22年度 5.6%	8.1%	4.1%	8.6%	7.2%	4.7%	5.1%	7.9%	7.7%	6.3%	6.1%	4.6%	↘	21.1%	▼	県民意識調査
		住んでいる地域の公共交通は便利だと思う人の割合		22年度 14.1%	16.7%	11.7%	17.5%	23.6%	18.1%	11.6%	12.3%	10.5%	13.5%	13.8%	12.2%	↘	56.2%	▼	県民意識調査
		住んでいる市・町は、外国人にも住みやすくなっていると思う人の割合		－	－	－	18.6%	5.2%	6.8%	12.4%	20.9%	13.7%	17.3%	19.7%	16.4%	↘	30.5%	▼	県民意識調査
		男女が支え合う地域や家庭づくりが進んでいると感じる人の割合		－	－	－	20.5%	18.8%	17.6%	17.4%	25.0%	20.3%	20.1%	18.4%	16.7%	↘			県民意識調査（母数）
②守り育てる「健康・地域医療」	客観	健康寿命	日常的に介護を必要としないで、自立した生活ができる生存期間	男性77.86年 女性83.12年	－	－	－	－	平成27年 男性79.22年 女性84.20年		－	－	－			↗			健康づくり推進実施計画
		人口１０万人あたりの医師数	丹波地域の医師の数を10万人あたりに置き直した数	22年12月末 165.7人	－	175.0人	－	177.9人	－	194.1人	－	206.1人				↗			医師・歯科医師・薬剤師調査
		人口１０万人あたりの病床数	丹波地域の病床数を10万人あたりに置き直した数	22年10月1日 1,454.7床	1,458.5床	1,472.0床	1,448.6床	1,505.4床	1450.8床	1459.6床	1475.6床	1491.1床	1428.1床			↘			医療施設調査
	主観	かかりつけの医者がいる人の割合		22年度 69.1%	73.9%	72.2%	74.0%	70.6%	78.6%	70.5%	75.7%	81.2%	80.3%	77.6%	75.3%	↗	69.7%	☺	県民意識調査
		心身ともに健康であると感じる人の割合		22年度 58.2%	58.7%	57.5%	71.1%	66.2%	69.2%	62.4%	66.4%	66.5%	68.5%	68.3%	63.4%	↗	67.1%	▼	県民意識調査
		医療機関の適切な受診を心がけている人の割合		－	－	－	88.2%	83.4%	86.0%	86.9%	86.6%	88.5%	79.9%	78.5%	80.5%	↘			県民意識調査（母数）
③安全・安心に暮らせるための「備え」	客観	まちづくり防犯グループの組織率	自治会の区域を活動区域として自主的に地域安全のまちづくり活動に取り組む団体数が自治会数に対して占める割合（カバー率）	22年度 97.1%	97.1%	97.7%	97.7%	97.7%	100%	100%	97.7%	97.7%	98.7%	98.7%		↗			県調査
		地域安全まちづくり推進員の委嘱数	知事の委嘱を受け犯罪防止や犯罪を招く環境を改善する活動を行っている人の数	22年度 50人	54人	50人	44人	40人	45人	46人	46人	42人	32人	36人		↘			県調査
		兵庫県住宅再建共済制度加入率	災害発生時に被害を受けた住宅の再建・補修を支援する制度に加入した割合	22年度 12.4%	12.9%	12.8%	13.0%	13.6%	13.7%	13.7%	13.6%	13.6%	13.5%	13.4%		↗			県調査
		ひょうご防災リーダー養成者数	地域・職場の防災活動の担い手となるリーダー養成のための講座を受講し、修了した人の数	22年度 36人	43人	88人	90人	93人	96人	122人	130人	137人	155人	157人		↗			県調査
	主観	住んでいる地域は治安が良く、安心して暮らせると思う人の割合		－	－	－	88.9%	86.0%	79.5%	80.1%	86.5%	78.9%	87.4%	86.9%	85.0%	↘	79.6%	☺	県民意識調査
		住んでいる地域では、住民による登下校時の見守り・夜間パトロールや街灯整備などの安全・安心を守る取り組みが行われていると思う人の割合		22年度 79.2%	80.0%	74.7%	75.3%	72.3%	68.6%	73.4%	76.5%	71.7%	76.1%	74.1%	72.6%	↘	71.8%	☺	県民意識調査
		住んでいる地域の災害に対する備えは、以前より確かなものになっていると思う人の割合		－	－	－	31.7%	39.4%	39.1%	33.9%	39.6%	36.6%	42.5%	43.2%	39.2%	↗	34.4%	☺	県民意識調査
		住んでいる地域で、災害に備えた話し合いや訓練に参加している人の割合		－	－	－	34.0%	43.3%	48.9%	35.2%	42.0%	36.7%	44.4%	42.1%	37.8%	↗	21.5%	☺	県民意識調査
		家庭で災害に対する自主的な備えをしている人の割合		－	－	23.9%	31.2%	35.3%	34.7%	28.1%	42.1%	38.3%	32.5%	41.9%	39.4%	↗	43.3%	▼	県民意識調査

※1：主観指標（令和3年）について、県下地域別で最高値のものは網掛、最低値のものは白抜きで表示
※2：基準年と最新年の比較は、平成22年度（統計結果が無い場合はその直近年度）と最新年度を比較し、向上を「↗」、低下を「↘」で表示。ただし、1%未満の変動は「→」で表示。
※3：全県値との比較は丹波地域の値が全県値より上位のものは「☺」、下位のものは「▼」で表示
＊印の欄については、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業規模の縮小による大幅な数値の減少や、事業の中止があった。

アンケートの結果

現行ビジョンの５つの将来像の達成状況の把握し、また丹波地域への率直な思いを様々な形で伺うため、丹波地域に関わりのある方を対象としたアンケート調査行った。

概要

１　アンケート名　　丹波地域の今とこれからに関するアンケート
２　調 査 対 象　　丹波地域に関わりのある方
　　（丹波篠山市及び丹波市外の在住者も含む）
３　実 施 形 式　　計１５問のアンケートに web 上で回答
４　調 査 期 間　　令和３年８月２４日（火）～　令和３年９月３０日（木）まで
５　回　答　数　　983 名

項目	結果概要
〔Q1〕主体的に地域課題の解決に活動する地域か	丹波地域が地域課題に主体的に解決する地域とみる人が、「そう思う(15%)」「まあそう思う(43%)」と半数以上を占める
〔Q2〕移住者（地元の方）との交流はあるか	「そう思う(16%)」「まあそう思う(40%)」と、移住者と地域の方の交流は進んでいる
〔Q3〕地域との関わりを深めたいか	地域との関わりを今よりも深めたいと思っている人が「そう思う(21%)」「まあそう思う(46%)」と多数にのぼる
〔Q4〕誰もが地域の一員として役割を発揮できているか	「そう思わない(12%)」「あまり思わない(34%)」の割合が「そう思う(7%)」「まあそう思う(32%)」の割合を上回り、誰もが地域の一員として役割を発揮できているとみる人は多くない
〔Q5〕10 年前に比べて豊かになったか	この 10 年で、丹波地域の生活の利便性が良くなったと思う人が増えている
〔Q6〕丹波地域の活気に結び付くと感じる産業	「農林業」が最も丹波地域の活気に結び付く産業と認識されており、次いで「宿泊、飲食サービス業」、「医療、福祉」が続く
〔Q7〕10 年前から食の関心は高まっているか	この 10 年で、食への関心が高まっていると思う人は「そう思う(13%)」「まあそう思う(48%)」と増えている
〔Q8〕誇りを持って「帰ってこい」と言えるか	誇りを持って「帰ってこい」といえる地域だと思う人は「そう思う(10%)」「まあそう思う(33%)」と、まだ少数にとどまっている
〔Q9〕「ふるさと丹波」で思い浮かべるもの	「ふるさと丹波」という言葉で思い浮かべるものとして「丹波の自然が」最も多く、次いで「黒豆や栗などの味覚」が続く
〔Q10〕丹波の森づくりの理念や活動を知っているか	若い世代を中心に、丹波の森づくり自体知らない人も増えてきている
〔Q11〕社会が変化する中、丹波地域も変わる必要があるか	「そう思う(50%)」「まあそう思う(36%)」と、多くの人が丹波地域の変化の必要性を感じている
〔Q12〕20 年前(10 年前)の夢が叶ったか	「そう思う(6%)」「まあそう思う(26%)」と、20 年前や 10 年前の夢が叶ったと感じる人は少数派である
〔Q13〕2050 年、人型ロボットはあるか	「そう思う(18%)」「まあそう思う(23%)」と、4 割程度にとどまる
〔Q14〕2050 年、空飛ぶクルマ等で自由に移動できるか	「そう思う(13%)」「まあそう思う(22%)」と、4 割程度にとどまる
〔Q15〕地域にどんな恩返しや貢献ができるか	437 人から回答があった（回答率 44%） ※意見の一部は＜調査結果＞を参照
〔自由記述〕丹波地域にあったらいいなと思うもの、地域への不満　など	309 人から回答があった（回答率 31%） ※意見の一部は＜調査結果＞を参照

＜10 代の回答の特徴（全体との比較）＞

・以下の設問では、「そう思う」「まあそう思う」の回答割合で、10 ポイント以上の差が見られた

〔Q4〕誰もが地域の一員として役割を発揮できているか
10 代：58%　＞　全体：39%

〔Q10〕丹波の森づくりの理念や活動を知っているか
10 代：　7%　＜　全体：27%

〔Q12〕20 年前(10 年前)の夢が叶ったか
10 代：12%　＜　全体：32%

・複数回答の以下設問では、順位の差などで異なる傾向が見られた

〔Q5〕10 年前に比べて豊かになったか
全体では、10 代に比べ「豊かになったと思わない」と思う割合が高かった。

〔Q6〕丹波地域の活気に結び付くと感じる産業
10 代・全体とも第 1 位は「農業、林業」であったが、第２位は、10 代では「医療、福祉」であるのに対し、全体では「宿泊業、飲食サービス業」であった。

＊ 全体で見ると、誰もが地域の一員として役割を発揮できているとみる人は多くはない一方で、10 代の半数以上の人が、丹波地域では誰もが地域の一員として役割を発揮できていると感じている。このことから、地域づくりの潜在的な担い手はまだいると考えられる。

＊ 丹波の森づくりについて、その理念や活動を知っている人は、全体でも3割未満と少ないが、10 代では1割未満と更に少ない。地域社会に目を向けると、地域（森）づくりが進展するなかでも、人口減少・高齢化に伴いコミュニティ機能の維持が年々難しくなりつつある。今一度、原点である丹波の森づくりの理念に立ち返り、運動としての森づくりの気運を高めつつも、これまでの習慣や枠組みにとらわれず、時代に即した新しいコミュニティのあり方を模索していく必要がある。

＊「10 年前の夢が叶ったか」という質問に対して、10 代は「そう思う」「まあそう思う」の割合が 12%と低い数値であった。これは、「どちらともいえない」の回答が約半数を占めていることから、丹波地域の 10 代は夢の実現に向け歩んでいる途中であるとも言える。ただし、全体で見ても「そう思う」「まあそう思う」の割合は 32%にとどまっている。

＊ 丹波地域を活気づけると感じる産業として、全体・10 代とも第1位は「農業、林業」であった。全体では、第2位、第3位が「宿泊業、飲食サービス業」「医療、福祉」の順に続いた。一方 10 代では「医療、福祉」「宿泊業、飲食サービス業」の順で続き、その順位が逆転している。また第4位は、全体・10 代とも「教育、学習支援業」であるが、10 代ではその割合が高く、自分事として捉えやすい分野の産業が、地域の活気に結びつくと認識していると考えられる。

＜回答者の属性（フェイスシート）＞

○性別

男性	541
女性	423
指定しない	14
無回答	5
計	983

○年齢

10代	236
20代	82
30代	96
40代	182
50代	229
60代	116
70代	36
80代以上	4
無回答	2
計	983

○職業

自営業	65
正規の職員、従業員	421
会社などの役員	38
派遣社員	6
家族従業者	4
パート・アルバイトなど	98
学生	254
専業主婦（夫）	17
無職	29
その他	49
無回答	2
計	983

○居住地

丹波篠山市	196
丹波市	538
その他	240
無回答	9
計	983

○居住地が「その他」の方の
丹波地域とのつながり(複数回答)

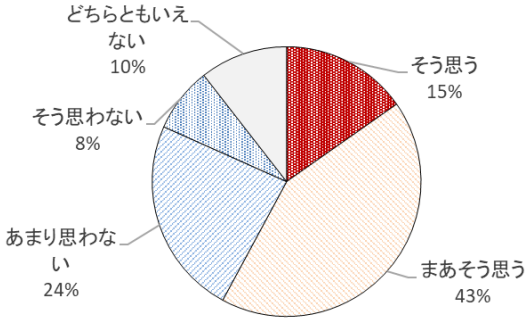
丹波地域で生まれた、 または暮らしたことがある	78
親戚の家がある	40
仕事やボランティアで関わっている	139
観光で訪れる	43
その他（学生団体の活動など）	21
計	321

○ビジョン委員の経験者(複数回答)

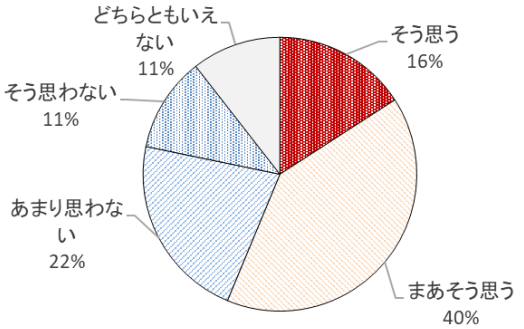
第1期（平成13～14年度）	4
第2期（平成15～16年度）	7
第3期（平成17～18年度）	0
第4期（平成19～20年度）	5
第5期（平成21～23年度）	7
第6期（平成24～25年度）	9
第7期（平成26～27年度）	9
第8期（平成28～29年度）	18
第9期（平成30～31年度）	21
第10期（令和2～3年度）	19
ビジョン委員の経験はないが、興味・関心がある	139

＜調査結果＞

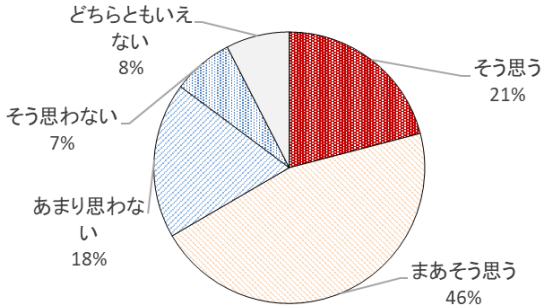
Q1. 丹波地域は、地域課題の解決に向けて　地域住民が主体的に活動する地域だと思いますか。



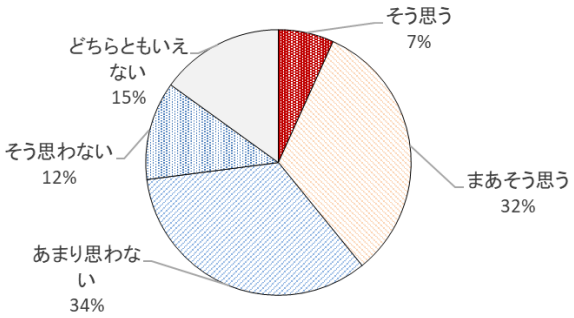
Q2. （丹波地域が地元の方）丹波地域へ移住されてきた方との交流はあると思いますか。（移住してこられた方）地域の人との交流はあると思いますか。



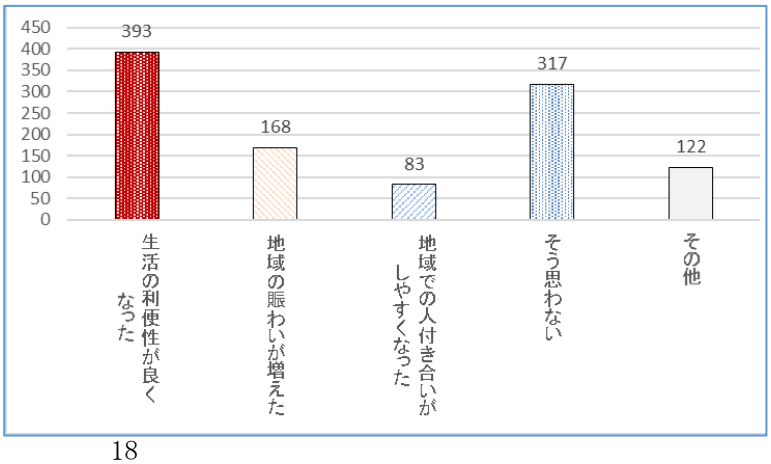
Q3. あなたは、地域との関わり（自治会活動への参加、困ったときの支えあいなど）を今よりも深めたいと思っていますか。



Q4. 丹波地域では、国籍、文化、年齢、性別、障がいの有無などに関わりなく、誰もが地域の一員として役割を発揮できていると思いますか。



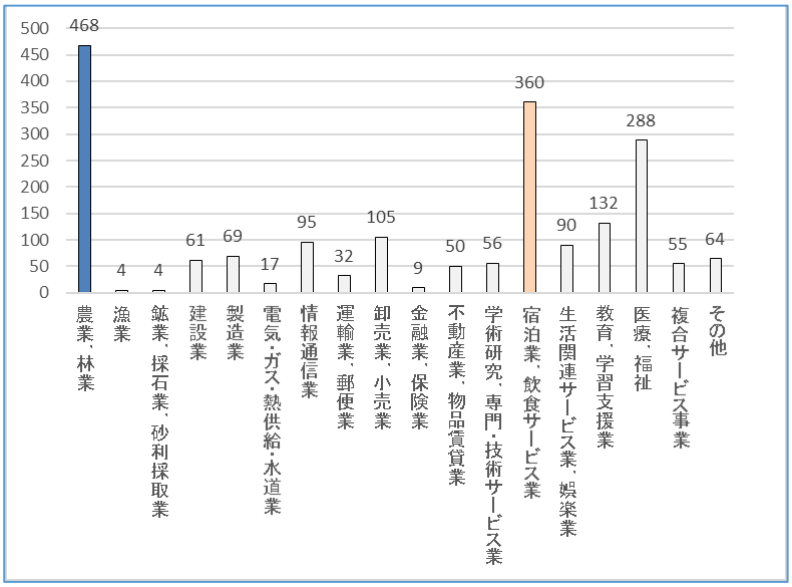
Q5. 丹波地域の暮らしや社会は、10 年前と比べて豊かになったと思いますか。（複数回答可）



Ｑ５「その他」の回答例

1	地域性もあると思いますが、段々と静かになってきた感じがします。皆さんと私も含め、歳を取ってきたんだなと感じます。活気は無くなったわけでもなく、ただ日常を送って行く事(田んぼや畑仕事・自治会活動)が大変そうです。
2	どの項目も地域差を感じる
3	賑わいが増えた地域と、過疎化が進んだ地域と大きく開いてきていると感じる
4	10 年前と比べ、休耕田が激増し、荒れた土地が増えた。山も同様に荒れたまま放置されている。
5	そもそも、「暮らしや社会」が 10 年単位で変化するような時代ではないと思います。よって、判断できない。がお答えです。
6	市街地への人口移動が進みむ中、市街地は利便性が向上し、農村部はますます不便になってきている。
7	多様な価値観や表現ができやすい地域になった

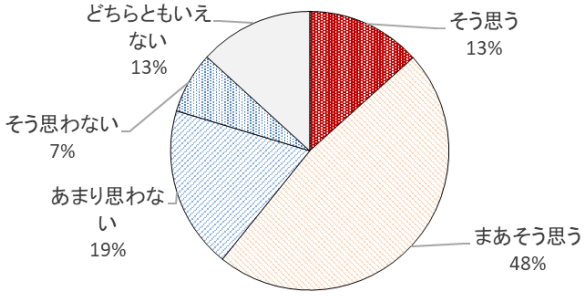
Q6. この 10 年間で、丹波地域の活気に結び付くと感じた産業はありますか。（複数回答可）



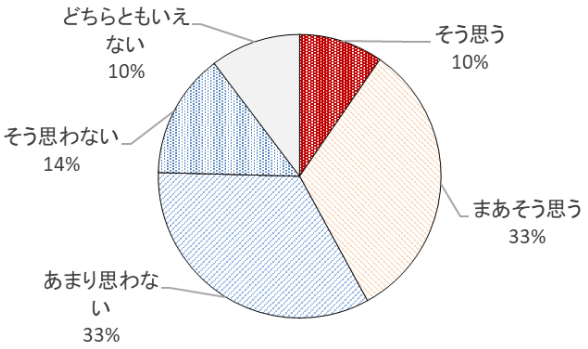
Ｑ６「その他」の回答例

1	丹波という食の代名詞という地域ならではの地産地消の安全な給食の提供や、自然と共に成長できる子供の教育環境を整えられる能力が丹波地域にはあると思うし、それを実践することで、過疎化を減少させ、都市からの人口流入を増加することが可能になると思う。
2	良きにつけ悪しきにつけ、活気につながる要素と感じたこと。 良：大型店の進出、多様な飲食店の起業、医療 悪：個人経営小売店の減少、農業生産者の減少、宿泊業の減少、
3	パン、菓子などの飲食
4	観光産業
5	Ｉターンの方たちによる活躍。

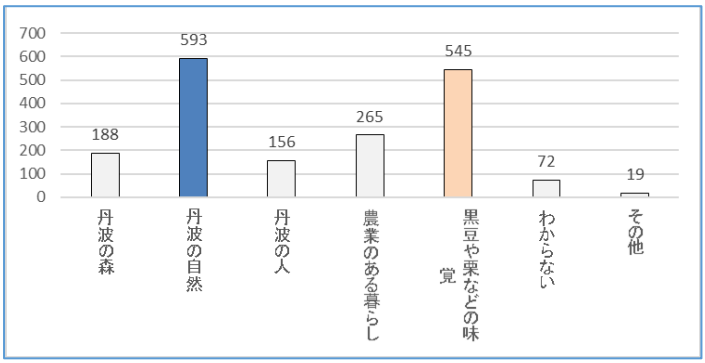
Q7. 丹波地域は、10 年前と比べて農作物の地産地消や食育が進み、食に対する意識や関心が高くなっていると思いますか。



Q8. 丹波地域は、進学や就職などで一度地域を離れた人に、誇りを持って「住みたい、子育てしたい、帰ってきてほしい」と言える地域だと思いますか。
（生徒、学生の方）進学等で丹波地域を離れても丹波地域に戻ってこよう、またはずっと丹波地域に住みたいと思っていますか。



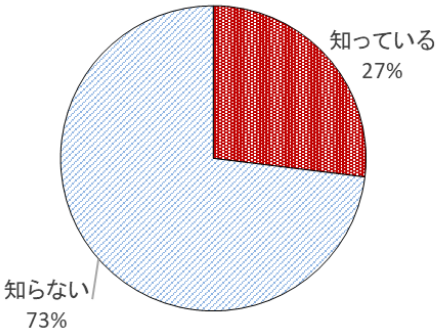
Q9. 「ふるさと丹波」という言葉で、何を思い浮かべますか。（複数回答可）



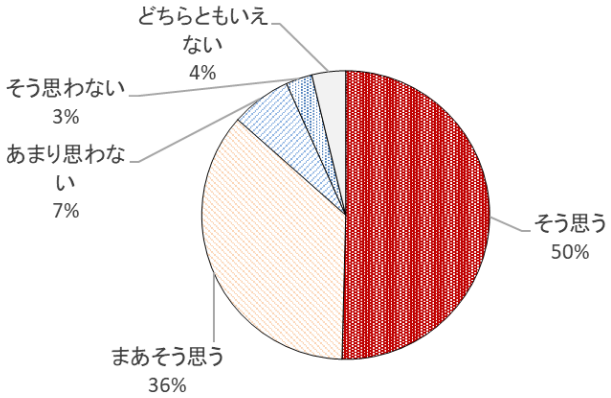
Q9「その他」の回答例

1	・田舎（たぶん、「ふるさと」の部分から） ・固定概念（古き良き時代を今に伝えたいといった考えの押しつけ感）
2	古い街並み・自然の中でのゆったりとした暮らし・食や自然、伝統行事などから感じることのできる四季
3	歴史、文化、立杭焼等の伝統産業
4	お寺（もみじ等）
5	農村の風景

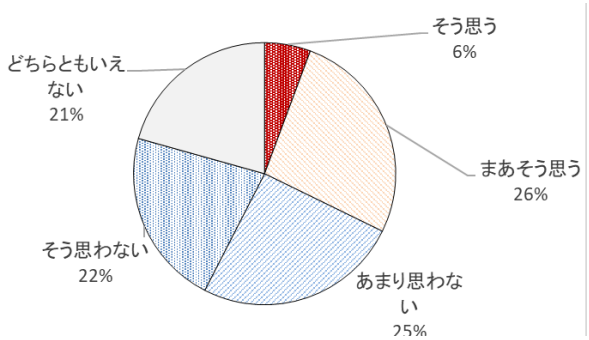
Q10. 「丹波の森づくり」の理念や活動を知っていますか。



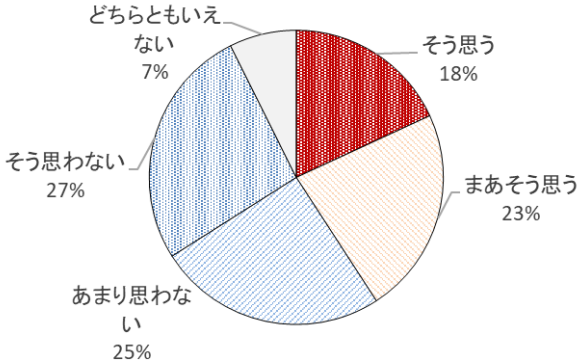
Q11. 国際化、情報化が進み、社会が変化していく中で、丹波地域も変わっていく必要があると思いますか。



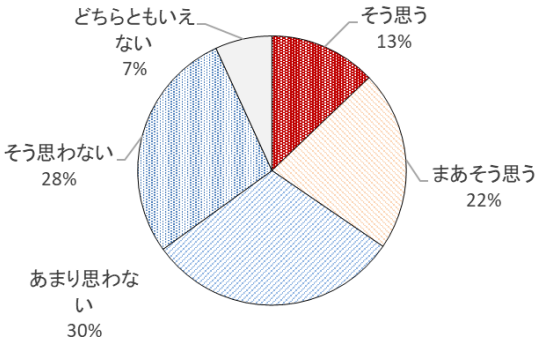
Q12. あなたが、２０年前（２０歳になっていない人は１０年前）に思い描いていた夢は叶いましたか。



Q13. ２０５０年、あなたの家に人型ロボットはあると思いますか。



Q14. ２０５０年、空飛ぶクルマなどで、行きたいところに自由に行けるようになっていると思いますか。



Q15. あなたが地域に恩返しや貢献ができるとしたら、どんなことですか（自由記述）

〇多かった意見

・地元である丹波地域に住み続け、働き、子育てすること。
・自分の得意分野、経験、技能を生かして、地域の活性化に役立てたい。
・世代間の橋渡し、人と人や地域内外をつなぐ役割を果たす。
・丹波地域の魅力を広め、伝えること。

〇特色のある意見を一部抜粋

1	移住者が増えることが望ましいが、丹波を第２の故郷として２拠点生活やボランティアなどに参加する方が、増えるような活動にかかわっていきたい。
2	まだまだ男女の格差（全て）があり、女性が住み続けたいと思う方が少ないので、地元地域から昔からの封建的な処を変えられるようにしてみたい。
3	温故知新という言葉があるように、歴史のある街丹波の個性を残しつつ、更に現代の新技術とマッチングさせた新たな取り組みを提案することで、このまちや次世代に丹波の魅力を伝えていきたい
4	世間話のなかで話題になるけど，ふわっとしていて消えてしまう想いやアイデア，危機感を記録し，他の人や未来世代に伝えていくこと。政策立案に役立てる形にまとめること。
5	学生でも関係なく地域と関わっていくこと 地域に元気を与えること

6	長年の海外暮らしと様々な国の人と働いた経験から、地域のボーダレス化のお役に立ちたい。 また、第一次産業の人手不足時のヘルプがしたい。

＊10 代においては、「将来、丹波地域に帰ってくること」が恩返しと考える回答が最も多かった。

【自由記述】質問の回答に対する補足、丹波地域にあったらいいなと思うもの、丹波地域の今やこれからに関すること、地域への不満、その他ご意見・ご感想など、自由にご記載ください。

○多かった意見

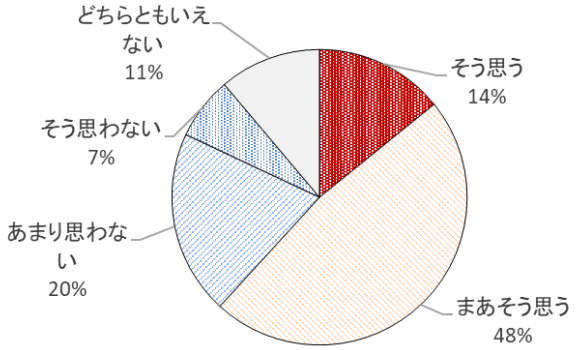
・子どもや若者が遊べる施設、場所が少ないので、丹波地域にあるとよい。
・車（マイカー）がなくても不便を感じないように、電車やバス等の交通機関を発展させてほしい。
・丹波の豊かな自然や恵みを守り、地域外にもっとアピールしていくべき。
・耕作放棄地が増えている。生産者が儲かるような農業の仕組みをつくり、農業従事者が意欲をもって取り組めるような政策が必要。

○特色のある意見を一部抜粋

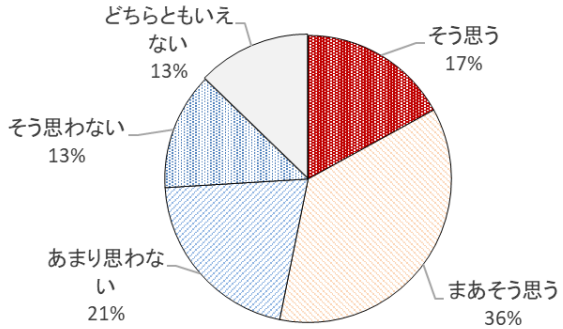
1	地域ビジョン委員会の活動を県民局が支援しているように、「交流促進パワーアップ事業」などを生きがいづくりのために、自由意思で集まる少数の人たちが、気軽に、長期間成果を上げることをあまり期待せずに活用できるものにしていけば、あちこちに地域活動を担う小さなグループが出来て、地域活性化につながるのではないかと思います。
2	林業が廃れて価値を回復できない山だらけの地域となっている。廃れた人工林だらけで自然豊かな山とは到底言えず、生物の乏しい川は貧しい川としか映らない。魅力を失ったこれらの自然環境を魅力ある自然に復活することが田舎の本当の魅力創出に不可欠と考える。
3	・丹波地域のシンボル的なイベント、観光施設、グルメはあったら良いと思います。また、大規模な工場団地を造成し企業誘致に取り組み、若い世代の雇用確保が必要であると思います。 ・丹波の森構想はすばらしい理念であるが、丹波の荒廃した森林を見ると説得力のないようなイメージを受ける。
4	長年にわたる「丹波の森」などの取組から、丹波地域の良さを守っていく意識の醸成は、ほかの地域よりもできていると思う。 しかし、加東市のように人口増になっている近隣自治体があるなかで、丹波地域はすでにこれだけ人口減少が進む地域になっているので、新しいものを取り込んだり、チャレンジすることにおっくうになってはいけないと思う。移住者、スマート農業機器、ノマドワーカーの受入れなど。 さらには、空飛ぶ車などの革新技術は、どこの地域もスタートラインに立っていないのだから、2025 年の万博に向け、急ピッチで丹波地域で１つに狙いを定めてやったらいいと思う。子どもの成長と同じで、１つできれば、そのうち２つめができるようになると思います。
5	国際化や情報化については、そんな時代だからこそ、門戸を開くこと、寛容性は大切だと思う。 一方で、だからと言って、丹波が変わらなければならない、と考える必要はなく、丹波の良さをより磨きながら、地域としての個性や価値観を大切にしてほしいと願います。そうすることで、国際化や情報化の時代に、丹波はより輝けると思うからです。

＜調査結果＞10 代抽出（選択式の設問のみ）

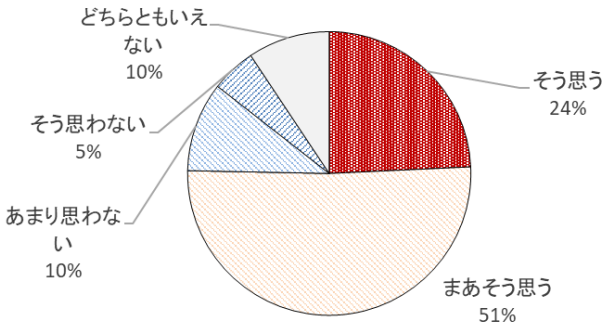
Q1. 丹波地域は、地域課題の解決に向けて地域　住民が主体的に活動する地域だと思いますか。



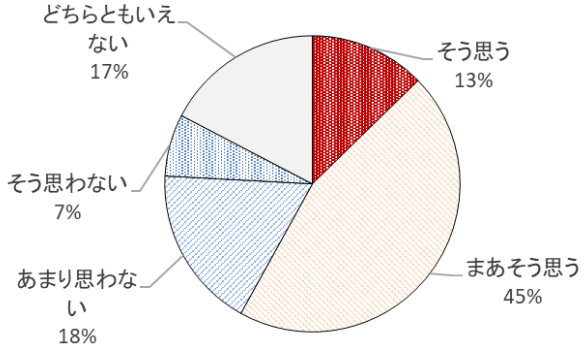
Q2. （丹波地域が地元の方）丹波地域へ移住されてきた方との交流はあると思いますか。（移住してこられた方）地域の人との交流はあると思いますか。



Q3. あなたは、地域との関わり（自治会活動への参加、困ったときの支えあいなど）を今よりも深めたいと思っていますか。

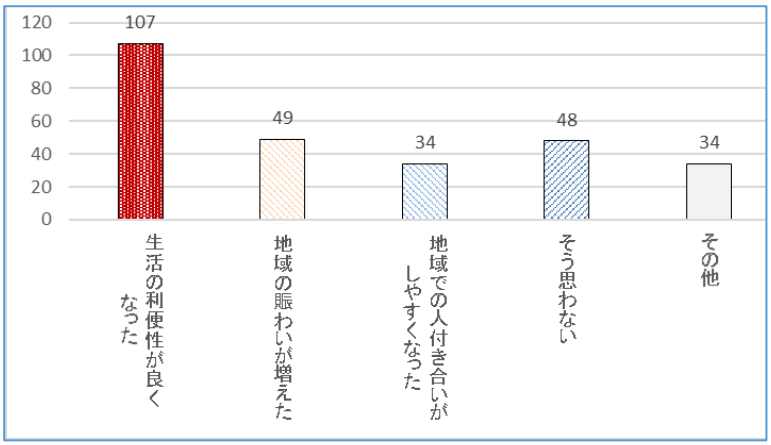


Q4. 丹波地域では、国籍、文化、年齢、性別、障がいの有無などに関わりなく、誰もが地域の一員として役割を発揮できていると思いますか。

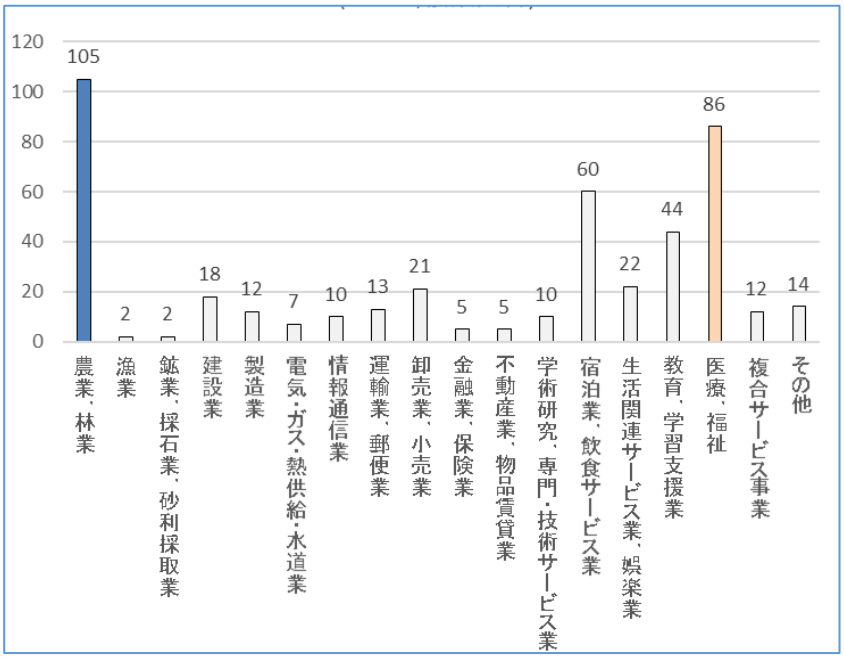


10 代抽出結果

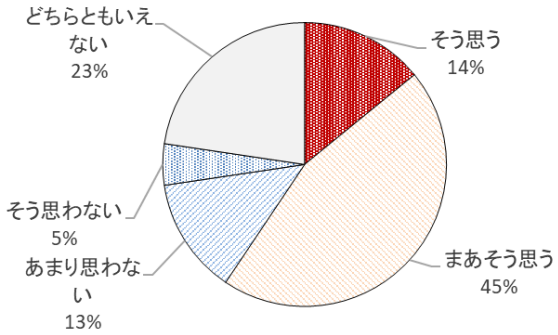
Q5. 丹波地域の暮らしや社会は、10 年前と比べて豊かになったと思いますか。（複数回答可）



Q6. この 10 年間で、丹波地域の活気に結び付くと感じた産業はありますか。（複数回答可）

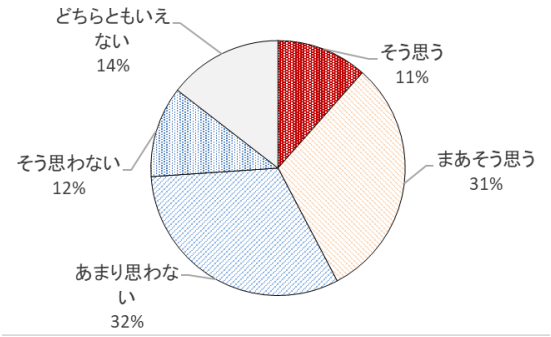


Q7. 丹波地域は、10 年前と比べて農作物の地産地消や食育が進み、食に対する意識や関心が高くなっていると思いますか。

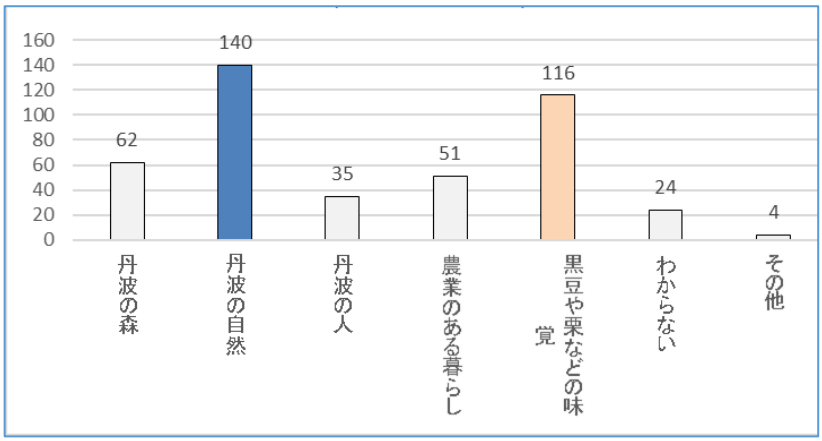


10 代抽出結果

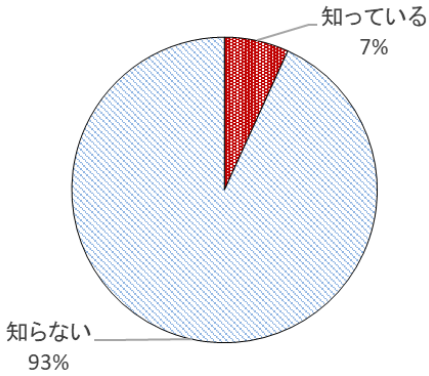
Q8. 丹波地域は、進学や就職などで一度地域を離れた人に、誇りを持って「住みたい、子育てしたい、帰ってきてほしい」と言える地域だと思いますか。
（生徒、学生の方）進学等で丹波地域を離れても丹波地域に戻ってこよう、またはずっと丹波地域に住みたいと思っていますか。



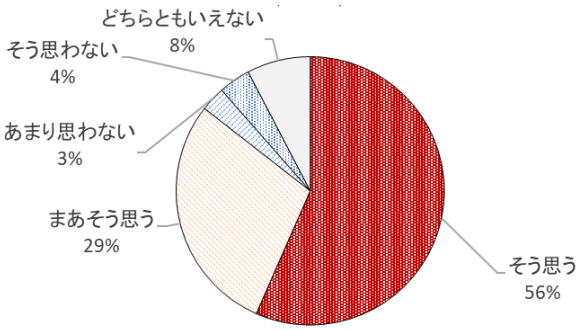
Q9. 「ふるさと丹波」という言葉で、何を思い浮かべますか。（複数回答可）



Q10. 「丹波の森づくり」の理念や活動を知っていますか。

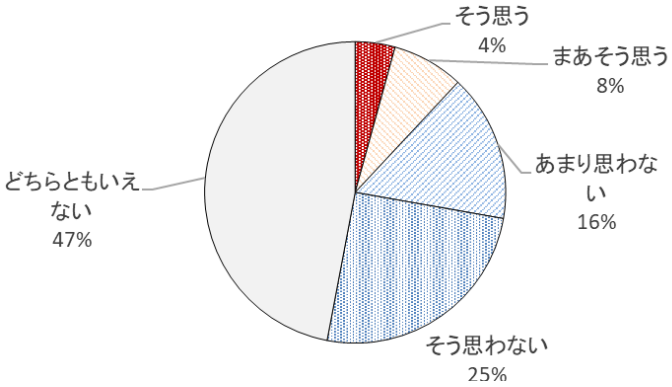


Q11. 国際化、情報化が進み、社会が変化していく中で、丹波地域も変わっていく必要があると思いますか。

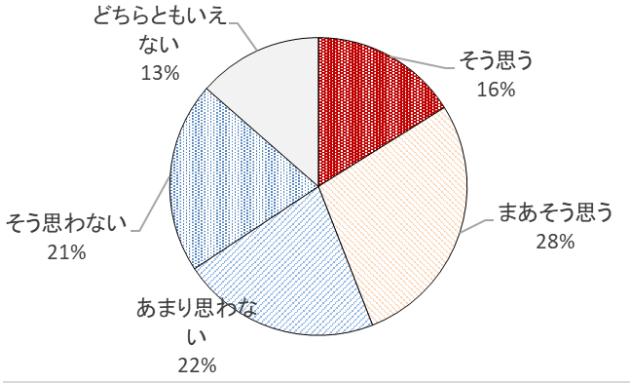


10 代抽出結果

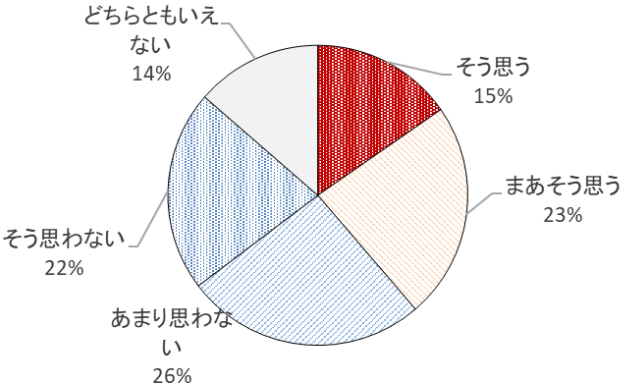
Q12. あなたが、２０年前（２０歳になっていない人は１０年前）に思い描いていた夢は叶いましたか。



Q13. ２０５０年、あなたの家に人型ロボットはあると思いますか。

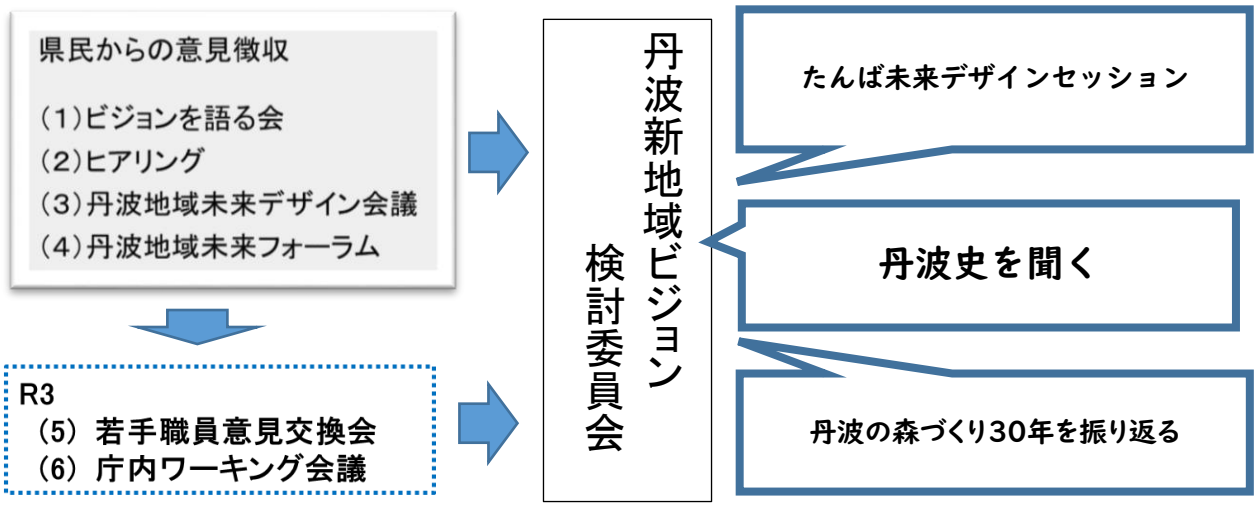


Q14. ２０５０年、空飛ぶクルマなどで、行きたいところに自由に行けるようになっていると思いますか。



新地域ビジョン策定にかかる検討の状況

令和２年から３年にかけ、さまざまな方法で地域の方々のご意見を聞き、庁内の施策と照らし合わせながら、検討委員会が検討を重ねて丹波新地域ビジョンを策定した。



1 ビジョンを語る会

別様でまとめた

2 ヒアリング

地域のキーパーソン、先進的な活動をしている事業者、地域団体等へヒアリング調査を行った。

日 程	対 象 者
2020.10.9	NPO法人 情報社会生活研究所
2020.10.14	NPO 法人 結
2020.10.14	丹波篠山市商工会
2020.10.16	丹波市商工会
2020.10.16	丹波青少年本部、こころ豊かな美しい丹波推進会議
2020.10.26	丹波篠山市社会福祉協議会
2020.10.28	丹波篠山市観光協会
2020.11.11	丹波篠山市老人クラブ連合会、丹波篠山市婦人共励会、丹波篠山市手をつなぐ育成会、丹波篠山市身体障害者福祉協議会
2020.11.12	丹波市観光協会
2020.11.17	丹波篠山市愛育会
2020.11.18	丹波市社会福祉協議会
2020.11.24	丹波篠山市国際理解センター
2020.11.24	丹波ひかみ森林組合
2020.11.25	丹波市国際交流協会
2020.11.25	丹波市森林組合
2020.12.13	丹波市立 農の学校
2020.12.22	丹波ひかみ農業協同組合

2021.4.2	一般社団法人　神楽自治振興会
2021.4.6	丹波立杭陶磁器協同組合理事長（雅峰窯）　市野秀之氏
2021.4.20	株式会社大地農園代表取締役社長　大地但氏

3　丹波地域未来デザイン会議　（一社）BEET に委託

丹波地域にゆかりのある（在住、在勤、在活）20 歳～40 歳の若者 55 名が 5 回にわたり討議を重ねて地域のデザインを描くワークショップを開催し、アイデア集「未来のアイデア 1000」を作成した。

（主なアイデアワード）
1　人口減少　2　新しい教育　3　これからの情報社会　4　未来の交通システム　5　丹波は自然がある　6　スローライフができる　7　農業ができる　8　今後も続く丹波の観光　9　歴史文化残る　10　雇用が守られる　11　移住を勧める空き家対策　12　思いをつなぐ高齢化社会　13　次につなぐコミュニケーション地域　14　地域のつながり支援　15　災害のない地域

4　丹波地域未来フォーラム

「未来のアイデア 1000」を元に 14 のテーマの中からグループで最も気になるテーマを選択し、ワークショップ参加者による 30 年後の未来を話しあった。

選択テーマ	結　果
テーマなし	他地域に住んだことのある者の視点から、丹波の魅力は、スローライフができる。食。自然のよさ。人との交わり。こういった良さをアピールして2地域居住の拠点となって欲しい
コミュニケーション	病気と犯罪がない社会となり、多世代が交流できる施設が充実する。また、固定したところに永住しないフリーアドレスの社会になる
空き家	シェアハウスとしての活用や短期間滞在ができる施設に。イベント型の活用（空き家の改修体験）
農業	30 年後も土に触れあえる農業があることは大事
空き家	マッチングアプリで同じ価値観を持つ人が集まるシェアハウスとして活用
農業	全自動化すれば今の課題は全てクリアする
空き家	空き家が自動保全されるシステムができ、シェアハウスとして活用されている。DIY が楽しめるリノベーションパッケージがある
テーマなし	集中から分散へ（県ビジョン課提案構想試案より）　世界から選んでもらえる丹波地域へ
雇用	30 年後は働かなくてもお金をどうにかして生み出せるような選択肢やシステムがあり、生活できているとよい
空き家	他人の話が聞けて、多様性を受け入れるようになり、2 世帯同居が進むと空き家は減る。家庭がオアシスになる関係ができる

○ 若手職員意見交換会

令和３年６月 18 日、入庁３年目～６年目の丹波県民局内の若手職員、一般事務職はじめ、環境科学職、獣医師、林学職や農学職、建築職　など多様な業種(11 名)の意見を聞く意見交換会を実施した。

30 年後の望ましい丹波地域に向かって一番大事なキーワード
楽農　発想力　想像力　人　風景　日本に丹波あり　つなげる　MORITEC
つながり　スマート　自由　コミュニティ　一人多役

○ 庁内ワーキング会議

丹波県民局の班長、所長補佐級による庁内ワーキング会議を開催し、施策との関連を協議した。

＜ワーキング会議＞

現状の施策との新地域ビジョンとの比較、未来ストーリーの作成検討(6/23)

＜ワークショップ＞

メンバーを施策に対応したグループに分け、将来像別（空間像・社会経済像・人間像）のワークショップ開催(8/3、8/11)

＜ヒアリング＞

新地域ビジョンに対応した関係課庁内ヒアリング（9/2､9/7）

＜勉強会＞

・「六次産業化に向けて」
講師：光井　将一先生
（兵庫県第六次産業化プランナー）
日時：令和３年 11 月１日 13:00～15:00
参加者数：20 名

・「次世代集落」
講師：平櫛　武先生(兵庫県地域再生アドバイサー)
日時：令和３年 11 月２日 15:00～17:00
参加者数：11 名

・「丹波型アグリツーリズモ」
講師：高根沢　均先生（関西国際大学国際コミュニケーション学部観光学科准教授）
日時：令和３年 11 月８日 14:30～15:30
参加者数：28 名

6 検討委員会

新地域ビジョンを策定するため、丹波地域で活動するキーパーソンなどが検討委員として、地域の 30 年後の未来を描いた

＜委員名簿＞　（順不同／敬称略）

氏 名	所 属 ・ 役 職
安達　鷹矢	株式会社　Local PR Plan　代表取締役
足立　雄一郎	丹波市商工会青年部長
角野　幸博	丹波の森公苑長、関西学院大学総合政策学部都市政策学科教授
構井　友洋	丹波篠山市担い手農業者協議会会長・丹波篠山市商工会青年部　部長・株式会社丹波篠山かまい農場代表取締役
上甫木　昭春	大阪府立大学名誉教授（生命環境科学研究科緑地環境科学専攻）
岸　孝明	第10期丹波地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ委員会委員長
清水　夏樹	神戸大学大学院農学研究科特命准教授（丹波篠山ﾌｨｰﾙﾄﾞｽﾃｰｼｮﾝ）
清水　徳幸	丹波市総合政策課長
鈴木　克哉	NPO法人里地里山問題研究所代表理事
瀧山　玲子	第10期丹波地域ﾋﾞｼﾞｮﾝ委員会副委員長
竹見　聖司（R2） 藤田　尚位（R3）	丹波篠山市創造都市課長
谷水　ゆかり	NPO法人Tプラス・ファミリーサポート理事長・谷水加工板工業株式会社代表取締役
土性　里花	一般社団法人ウイズささやま総務課長・丹波篠山市社会福祉協議会副会長
中川　ミミ	一般社団法人Be代表理事
宮垣　良一	丹波大空の会元代表
＜専門アドバイザー＞R3.9～	
光井　將一	兵庫県第六次産業化プランナー、奈良先端科学技術大学院大学特任教授
平櫛　武	兵庫県地域再生アドバイザー、キタイ設計（株）事業開発本部

○ 第１回検討委員会（令和２年７月 28 日）

内容：委員長の選任、検討の進め方、データ資料の提供

○ 第２回検討委員会（令和２年 12 月３日）

内容：将来構想試案骨子案の説明、丹波地域意見徴収の記録の報告、
更新データの提供）

○ 分科会の開催

交流・元気分科会　（令和３年３月８日）
絆・安全安心分科会（令和３年３月 16 日）
自立・次代分科会　（令和３年３月 19 日）

○ 第３回検討委員会（令和３年７月５日）

内容：分科会の開催結果共有
現行ビジョンの確認
新地域ビジョンの構成案について

○ 第４回検討委員会（令和３年９月３日）
　　内容:丹波新地域ビジョン骨子案の決定

たんば未来デザインセッション

　丹波検討委員会委員長角野幸博教授とゲストスピーカーによる 30 年後の未来を描くオンライン対談を開催

○ 開催日時　令和３年７月 26 日（水）13;00～15:00
○ テーマ　　「2050 年の地域像ー空間像、社会像、人間像」
　　「2050 年の暮らし方、住まい方、働き方」
○ 出演者　　角野幸博（関西学院大学建築学部長・教授）
　　木多道宏（大阪大学大学院工学研究科教授）
　　水方秀也（(株)竹中工務店開発計画本部長(西日本)）
　　光井將一（奈良先端科学技術大学院大学特任教授）
　　岡絵里子（関西大学環境都市工学部建築学科教授）
○　当日参加者：３６名

丹波市史を聞く

　新地域ビジョン策定に向け、丹波地域の歴史を学ぶ勉強会を開催

○ 開催日時　令和３年８月 31 日（火）14:00～16:00
○ 開催場所　たんば黎明館多目的ルーム
○ 講　　師　松下　正和（神戸大学地域連携推進室　特命准教授）
○ テ ー マ　「丹波の風土・文化の固有性」
　　「丹波村落の伝統・風習（含コミュニティ・ルール）」
　　「丹波人気質について」など

丹波の森づくり 30 年を振り返る

　別様でまとめた（未）

ビジョンを語る会

地域の方と兵庫県の幹部が車座になって、地域の課題や 30 年後の未来を語り合う「丹波地域ビジョンを語る会」を令和２年から３年にかけて８回開催した。

１ シリ丹バレー キックオフミーティング参加者

○ 開催日時　令和２年９月２７日（日）15:45～17:00
○ 開催場所　丹波篠山市立四季の森生涯学習センター　研修室大
○ 参加人数　１１名
○ 話　　題　移住者や関係人口からみた丹波地域のこれから

２ 丹波 JC

○ 開催日時　令和２年１０月２２日（木）19:00～20:30
○ 開催場所　兵庫県柏原総合庁舎職員福利センター会議室
○ 参加人数　１６名
○ 話　　題　丹波市の若者経営者からみた丹波

３ 丹波地域農業経営士･女性農業士･青年農業士

○ 開催日時　令和２年１１月２日（月）16:00～17:40
○ 開催場所　兵庫県柏原総合庁舎職員福利センター会議室
○ 参加人数　１６名
○ 話　　題　丹波の農業

４ 丹波篠山 JC

○ 開催日時　令和２年１１月２日（月）19:00～20:10
○ 開催場所　丹南商工会館　２階大研修室
○ 参加人数　１１名
○ 話　　題　丹波篠山市に住む青年が感じること

５ 丹波地域で子育て中の方

○ 開催日時　令和２年１１月２３日（月・祝）10:00～11:20
○ 開催場所　おとわの森子育てママフィールド「プティ・プリ」
○ 参加人数　１３名
○ 話　　題　丹波地域での子育ての現状と課題

６ 丹波の森大学受講生

○ 開催日時　令和２年１２月１９日（土）11:40～13:00
○ 開催場所　丹波の森公苑　２階セミナー室
○ 参加人数　１４名
○ 話　　題　丹波の森で暮らす人の歴史と災害対応

７ 丹波篠山市地域おこし協力隊

○ 開催日時　令和３年６月２４日（木）11:00～12:20
○ 開催場所　丹波篠山フィールドステーション　２階セミナー室
○ 参加人数　１０名
○ 話　　題　丹波ファンから森の市民へ

８ 初期ビジョン策定メンバー

○ 開催日時　令和３年８月４日（水）14:00～16:00
○ 開催場所　丹波の森公苑　会議室３
○ 参加人数　４名
○ 話　　題　みんなで丹波の森策定から２０年を振り返って

丹波地域ビジョン委員のこれまでの活動

地域住民の参画と協働により、丹波地域ビジョン「みんなで丹波の森」が掲げる将来像の実現をめざして、様々な活動に取り組んできました。
平成 13 年の設立以来、20 年間で 893 名の方々に活動いただきました。

第1期(H13･14年度／109名)

自然環境の保全、コミュニティづくり、地域の活性化等の１１のプロジェクトに取り組んだ。

○丹波の地域づくりなどを進めるＮＰＯ法人「たんばぐみ」の設立

丹波地域での地域活動を大きく前進させることになった。

・たんば塾　M-1 グランプリ、まちづくりフォーラム

・たんば座　オペラ　おさん茂兵衛の上演

○丹波ブランドを全国に発信する組織「丹波食文化発信機構」の提案

関係者により設立され、丹波ブランドの全国発信や、農業を通じた交流イベントなどが実施されている。(事務局：たんばぐみ)

第2期(H15･16 年度／111名)

都会に近い田舎の活用、高齢者を支え合う仕組み、食文化の発掘など１２のプロジェクトで実践活動に取り組んだ。

○丹波に眠る資源の掘り起こしとその普及

大阪の飲食店で「丹波布」(現丹波市青垣町佐治で明治末期まで農家によって盛んに織られていた木綿織物)がコースターに用いられ、「氷上つたの会」が製造したよもぎ餅が店内で販売されるといった成果があった。

○小中学生を巻き込んだ「ヒメボタルなどの自然環境調査」の実施

丹波市山南町で「第１回ヒメボタルまつり」が開催され、都市との交流、環境保護意識の向上などの成果に繋がっている。

第3期(H17･18年度／142名)

シンボルプロジェクト「たんば田舎暮らし支援プロジェクト」や、地域づくりニューリーダー塾の開塾など１０のプロジェクトに取り組んだ。

○シンボルプロジェクト「たんば田舎暮らし支援プロジェクト」の進展

イベントなどで「田舎暮らし案内所」を設置し、丹波での田舎暮らしの相談や田舎暮らし情報の希望者を登録し、田舎暮らし体験イベントに招待して交流を深めた。

丹波へのリピーターを増やすため、都会からＩターン･Ｕターンした住民の有志が、

大阪や阪神間で丹波での田舎暮らしの経験談を語る「たんば・田舎暮らしフォーラム」を開催した。

また、ビジョン委員会の活動の中から、不動産情報にも対応するため「ＮＰＯ法人ほっと丹波」が設立された。（2012 年３月解散）

第4期（H19･20 年度／102 名）

シンボルプロジェクト「たんば田舎暮らし支援プロジェクト」の一層の推進など１１のプロジェクトに取り組んだ。

〇シンボルプロジェクト「たんば田舎暮らし支援プロジェクト」の推進

「たんば・田舎暮らしフォーラム」等のイベントで「田舎暮らし案内所」を設置し、「ＮＰＯ法人ほっと丹波」と連携しながら、田舎暮らしの相談、丹波地域のＰＲや情報提供を行った。

また、田舎暮らし体験イベントを企画。「田舎暮らし情報提供希望者」を招待して交流を深めるなど丹波地域へのリピーター確保と定住促進に取り組んだ。

〇丹波篠山トイレマップ（ホームページ）の作成

障害者が気軽に外出できるよう「いつでも、誰でも使えるトイレを増やしていく」ため、丹波地域全域のトイレ調査（約２００箇所）を実施し、トイレマップとしてまとめてホームページに掲載

第5期（H21～23 年度／101 名）

ビジョン改訂版の策定のほか、シンボルプロジェクト「たんば田舎暮らし支援プロジェクト」の一層の推進など１１のプロジェクトに取り組んだ。

〇シンボルプロジェクト「たんば田舎暮らし支援プロジェクト」の推進

都市住民を丹波地域に招き、里山・田舎暮らし・歴史散策ツアー等を開催し、都市住民と丹波地域の住民との交流を進めたほか、都市から丹波地域への移住者と丹波地域の住民との交流会を開催し、相互理解を深めた。

〇有機農業実践体験「丹波の里塾」の実施　（8 期まで継続）

有機野菜の栽培体験を通して、食の安全や丹波地域の農産物への関心を高めるため、「丹波の里塾」（平成 21 年度～22 年度：計 6 回、平成 23 年度：特別塾を含め計 8 回）を実施し、都市部をはじめとする参加者が有機農業の栽培等に取り組んだ。

第6期(H24･25 年度／77 名)

シンボルプロジェクト「たんばを楽しむ連携・交流プロジェクト」を中心に８つの実践活動グループが、５つの将来像実現に向け様々な活動に取り組んだ。

〇シンボルプロジェクト「たんばを楽しむ連携・交流プロジェクト」の推進

田舎暮らし体験施設の開設、運営を支援し、施設を活用したＩターン者と地域住民の交流会を開催。Ｕターン者、Ｉターン者、地域住民がともに丹波のまちづくりを考えるフォーラムを開催し、まちづくりの課題などを共有するとともに相互理解を深めた。

〇高齢者を対象とした「いきいき健康ひろばモデル事業」の実施

インターバル速歩を体験する「いきいき健康ひろばモデル事業」を篠山市と協働で開催し、誰もが気軽に取り組めるウォーキングからの健康づくりに取組んだ。

第7期(H26･27 年度／90 名)

シンボルプロジェクト「たんばを楽しむ連携・交流プロジェクト」を中心に８つの実践活動グループが、５つの将来像実現に向けた活動に取り組んだ。

〇地域資源を活用した商品づくりと販売によるコミュニティビジネスの立ち上げ

丹波地域に当たり前に存在し、価値あるものと認識されていない素材を掘り起こし商品化に取り組んだ。多くの家庭に自生する「ゆず」から製造した「ゆずこしょう」は、東京での販売や活動終了後も継続販売への道筋をつけるなど、結果を残した。

〇高校生を対象としたキャリア形成を支援する「夢授業」の実施（8 期まで継続）

地域の大人たちが自らの体験を学校で語り、授業では学べない多様な生き方を伝えることで、高校生が社会に出る際の選択肢を増やすなど、キャリア形成の一助となる機会を提供した。

第８期では「夢授業」の実施校を３校にまで拡大し、任期終了後は、一般社団法人「BEET」を設立してさらなる展開を図った。

第8期(H28･29 年度／77 名)

ビジョン改訂版に掲げた５つの将来像の実現に向けて、８つの実践活動グループが活動に取り組んだ。

〇地域に埋もれた食材を活用した新たなビジネスの創出

有害獣として駆除数が増加している「鹿」の活用を図るため、お土産用として鹿肉を食べたことがない人でも気軽に食べられることをコンセプトに、保存性／運搬性の高いジャーキーの新商品を開発。

鹿肉料理専門店「無鹿」や「丹波いっぷく茶屋」（北近畿豊岡自動車道氷上 PA）、丹波市立薬草薬樹公園「丹波の湯」など販路開拓を進め、黒字化に成功し、2 年目は補助金を返上。任期終了後も、有志が組織を立ち上げ鹿肉ジャーキーの販売を継続。

〇ビジョン委員と地元のママパパ世代による地域ぐるみでの里山整備活動

「裏山に子どもの遊び場をつくりたい」という女性委員の思いを起点に、ママ世代が中心となって、子ども、パパ、祖父母世代を巻き込み、地域ぐるみの里山整備活動に発展。

集大成としての「森の音楽会」は地域をあげての開催となり、単に荒れた里山が整備されただけでなく、「山づくりを通じた地域づくり」につながった。任期終了後も、「森の音楽会」等の開催を継続

第9期（H30・31 年度／47 名）

５つの将来像の実現に向けて、６つの実践活動グループが活動に取り組んだ。

〇「つなぐ」をテーマに、人と人、地域と地域、過去と未来をつなぐ事業を展開

明智光秀ゆかりの地“金山”を舞台に八上城跡、黒井城跡、金山城跡で一斉に「のろし」をあげ、さらに雲海や城郭の姿をドローンで撮影したものを DVD として地域の魅力を発信した。

〇防犯防災、男女共同参画、生きづらさを抱える人たちへの支援と情報提供

誰もがいつまでも生き生きと暮らせるように「ひきこもり・若者相談マップ」の作成やゲームを通したひきこもり支援などを実施。紙芝居を製作しての啓発活動や「命を守る防災教室」での消火体験や避難所パーテーションづくりを実施した。

第 10 期（R2・3 年度／37 名）

５つの将来像の実現に向けて、５つの実践活動グループが活動に取り組んだ。

〇歴史的農業遺産「灰屋」の再建に取り組み地域の課題解決のきっかけに

草刈りでできた大量の刈り草を有効利用するため、焼土肥料を作製。焼土肥料を作るために、焼土肥料の勉強会を開催し、半壊していた灰屋を委員と地域住民で再建した。さらに、灰屋の魅力を広く周知するため「灰屋ウオーク」や「灰屋の残るまち写真展」も開催。

2050年を描く未来ストーリー

①　森・川・里の自然再生・活用

里地・里山や人工林の適正管理、動植物の生息に配慮した河川等が整備され、環境保全活動団体や地域住民が環境保全活動を積極的に実施している。その結果、オオムラサキ、ホトケドジョウ、バイカモ、クリンソウ等の貴重種が生息する豊かな自然環境が保たれている。

里山林や河川等を活用し、人材の育成や体験型の環境学習が行われ、都市部の県民が豊かな自然環境に触れ合うエコツーリズムが実施されるとともに、環境保全活動団体の担い手の育成に繋がっている。企業の CSR 活動による生物多様性保全活動が一般的となっており、地域の環境保全活動をサポートしている。

人工林の間伐材など森林資源がバイオマス資源として利用され、バイオマス発電で得られた電力による電気自動車の活用など、環境に配慮した生活や事業が営まれ、エネルギーの地産地消が成立している。

人と野生動物の棲み分けや GIS（地理情報システム）・ICT（情報通信技術）を活用した野生動物の保護管理により、シカやイノシシなど野生鳥獣による農作物や森林への被害が減少している。また、環境 DNA 技術を活用し、生物種を効率的に把握することにより、希少種の保護や外来種の駆除が行われ、在来種による生態系が維持されている。

プラスチック製品の使用削減、バイオプラスチック製品の利用促進、廃プラスチック製品の回収等により、源流地域の丹波地域から河川を通じて、海域に流れ込むプラスチックゴミ量は減少している。

②　景観の保全－温かくて、懐かしい丹波の景観を残す－

人口減少により交通インフラなど社会資本の老朽化への広範囲な対応は困難となり、集約と効率化が進むことで丹波地域の新たなコンパクトシティが実現している。城下町篠山の伝統的まちなみを形成する地域や日本六古窯の一つ丹波焼の窯業集落などの、歴史的まちなみや美しい景観・田園風景等を保存・継承する取組は一層深まり、まちなかに必要な都市機能を集約した丹波地域ならではの魅力が際立つ地域づくりが浸透している。

コンパクトシティの実現により地域の課題であった医療や福祉は充実し、中心となる市街地は活力ある経済を取り戻し、郊外の環境保護にも寄与するまちづくりが進展している。定住が進むまちの中心では、自動車にかわる新たな次世代モビリティが安心かつ快適な暮らしを実現し、さらには、健康産業の著しい発展により医療機器の進化が人々の身体機能をサポートすることで高齢者等が自由に移動し活躍する時代が到来。

まちの活力を維持しながら生活環境の課題を解決するため、丹波の特徴ある農業のあり方も変容している。まち全体の再整備により農地は新たに郊外に整備され、その維持

管理を含む営農は、デジタル技術、ＡＩやロボットが台頭することで、技術革新による自動化が格段に向上し、人の関与が大幅に減少している。
こうした住環境の見直しやＱＯＬの向上により、従来、労働に費やしていた時間を人々は余暇や自分時間として活用し、地域を支える文化、芸術、観光などの分野に多くの人が関わることで、活力ある新しい暮らしのかたちが定着している。

⑤未来都市の創造　⑭創造都市・創造農村の形成－文化の発信力強化
⑱次世代コミュニティの形成　共有

てんぐす病の予防・治療方法が確立し、桜の寿命が１００年を超えることも珍しくなくなっている。四季を通じた、桜の３Ｄ立体映像により、時間、場所、天候、花粉等を気にすることなく、人々は「たんば桜づつみ回廊」を愛でることができる。元々あった桜が枯れて無くなってしまい、桜は復活させたいが、手入れをする人手と予算が無い場合には、３Ｄプリンターにより、桜のコピーを現地に設置することもできるようになっている。

「街道」訪問がブームになっており、○月○日の「たんば三街道の日」には、全国各地から街道マニアが丹波に集まり、丹波の名産品や「たんば桜つづみ回廊」を大いに楽しむ。

自動運転可能で免許不要の「電動アシスト自転車」が日常生活における人々の足となっており、管内のすみずみまで整備されたサイクリングロードを使って、気軽に行きたい所へ行けるようになっている。もちろん、「街道」訪問もこの「電動アシスト自転車」を利用して行う。
「電動アシスト自転車」は、管内のＪＲ駅で、スマホさえ持っていればいつでも（駅が無人でも）借りることができ、使用後は、どのＪＲ駅で、いつ返却しても構わない。使用料金は、スマホに内蔵されたＧＰＳ等により、使用時間と距離により自動で計算され、課金・徴収される。

③　集落保全の仕組み構築－未来へとつなぐ集落資産－

丹波出身者だけでなく、都市部の住民が丹波に「第二市民」として住民登録することができるようになった。帰省先を持たない都市部の住民にとっては、丹波が第２の故郷ともいえる場所となっている。

「第二市民」に登録すれば、空き家や古民家を改修したゲストハウスに安価で宿泊や長期滞在ができるほか、丹波に来るための交通費を行政が一部補助してくれるインセンティブもある。

その一方で、「第二市民」は、自治会の集まりなどにも参加が義務づけられるし、日役や祭り、イベント等にも参加しなければならない。自治会の集まりなどは平日の夜に開

催されることが多いので、オンラインにより参加可能なものも多い。

今のところ、都市と丹波との滞在比率は７：３。地方税法が改正され、居住実態に応じて、住民票のある自治体と「第二市民」の自治体とで住民税を按分する制度ができた。居住実態の証明は、ＩＣＴを活用し、駅や公共施設、コンビニ等に設置されている端末にマイナンバーをかざせば良い。

丹波には自分を待ってくれる人もいるし、自分でも何らかの形で活躍できる場所と時間がある。だから私は丹波に足繁く通ってしまうのだ。

兵庫丹波地域は、様々な目的をもった人が訪れやすい、また住みやすい町となっている。

阪神間から１時間程度で来られるという利便性の良さと多くの人を魅了する食や自然がある。また、小さな子供がいる家族連れ、ペット連れ、障害を持つ方でもストレスなく楽しめることができるようにSNSでの紹介はもちろん、町の中にも風景を彩るサインが充実。観光名所、兵庫丹波の食を楽しめるレストラン、ペット同伴可能な店舗、子育て応援店舗など、利用したい場所が一目でわかるようになっている。宿泊施設は、単に「泊まる」だけでなく、兵庫丹波地域を楽しめる自然や農業、文化等の体験メニューやレンタルオフィスが充実しており、訪れた人々が思い思いのスタイルで余暇を楽しんだり、仕事をしたりしている。

移住を考えている人向けの相談窓口やお試し移住などの制度も充実。移住を考えている人はこれらの制度を活用し、ゲストハウスへ宿泊したり、先輩移住者の話を聞いたり、さらに、各集落が明示している「移住にあたっての10箇条」を掲げた集落において、祭りや草刈り、農作業等に参加している。これらの制度の活用により、移住後のストレスが軽減され、移住者はスムーズに夢の実現に向けスタートできている。また、受け入れ側も、新たな担い手が確保でき、集落の維持や祭りなどの文化が継承できるようになっている

このように兵庫丹波地域では、様々な人が訪れ、地域住民と交流することにより新たな文化が生まれ、他にない個性豊かな町として、地域全体が活性化してきている。

⑩　多様なワークスタイル共有

④　エネルギーの自立分散供給－地産地消の実現－

ドローン等の航空レーザー測量や立体動画や過去の空中写真、森林簿や森林計画図などあらゆる森林情報がデジタル化され、これに登記情報や住基ネット等の所有者情報からＡＩが森林境界確定を確定している。ＶＲにより高齢者や不在村者等も現地に赴く必要もなく、相続者の追跡など煩雑な事務手続きもＡＩが行うようになり、丹波の里山の地籍がほぼ確定された。

また、小規模所有林を公有化し里山を資源採取の場として公的管理している。里山沿いの耕作放棄地で早生樹によるバイオマス生産も行われている。ＡＩやＧＰＳ技術により無人機械が里山等から計画的にバイオマスを採取し、その結果、かつて大正・昭和の薪炭採取の次代同様に、里山が尾根まで見通せるバッファーゾーン化し野生鳥獣との棲み分けの場となっている。農地、河川、道路の草刈りも自動化され、今まで分解し炭酸ガスを放出していた植物系のゴミを産廃ではなく全て資源として回収収集している。

また、少子高齢化で限界集落が自然消滅し順次整理され、小学校区１集落レベルに集約された。この集約集落レベルで、里山から供給されるバイオマス燃料を利用し、安定的に発電や熱供給のバイオマス施設が稼働し、エネルギー自給率 100%を達成している。老朽化したインフラの再構築時に熱導管設置し熱を公共施設や住宅へも供給している。木材を建築材料としてではなく、電気と熱の形に代え、誰もが無意識に使っている。

ＡＩ化され人々は働くことがほとんど無くなり、ベーシックインカムの時代となり、人々は里山をフィールドにしたアクティビティーを楽しんでいる。チェーンソーによる立木伐採などかつて危険で敬遠された人力作業を楽しむなど、一部過去への回帰も見られるようになった。

⑤　未来都市の創造

②　景観の保全－温かくて、懐かしい丹波の景観を残す－共有

⑥　農の持続化とフードバリューチェーンの構築

今後、丹波地域でも限界集落が増え、所有者が不在・不明・あいまいな農地や山林が増えるだろう。しかし、３０年後には、シェア・レンタル農地・山林として活用、管理できる仕組みが出来、農村集落での体験や学びの場が増加している。

丹波地域には大規模な企業的農業経営が増加している。ほ場や水の管理は、カメラと管理アプリで常にスマホ確認、遠隔操作が当たり前になっている。病害虫や肥培管理、収穫作業の多くが、ドローンやロボットによる機械作業。草刈りも一定以上に伸びると自動レーザー照射で簡単になっている。あらゆる分野の農の匠の技もデータ蓄積され、作業の適期もスマホアプリが知らせてくれる。果樹剪定も「匠の眼鏡」をかければ、切るべき枝がわかる。これら機器は、大規模経営だけでなく、小規模な営農組織や兼業農家でも利用されている。

農業経営者間での連携だけでなく、地域での人材や機器のシェアやレンタル等の仕組

みができ、異業連携があたりまえになっている。建設業や観光業、メーカー等、繁忙期の異なる会社で人材や機器を多角的に利用、シェアすることで、年間雇用、一時雇用、過剰投資を回避して、儲かる経営が実現。働く人も組織に属す人が減り、自由で様々な働き方が可能になっている。

誰もが未来の地域産業へ応援・投資が手軽にできる。応援はポイント化され、丹波地域でポイント利用ができる。投資には収益配当等など特典が設けられ、機器の開発や導入を促進する仕組みができている。企業や個人は、納税義務の内、一部を納作業に変えることができる。農村での草刈りや溝掃除、収穫作業、村まつりへの参加等、地元事業者や集落が募集する作業に従事する。

上記のことを進めていくために、丹波地域には、ヒト・モノ・コトの情報、仕事のマッチングを担う地域商社あるいはシステムが開発されている。この地域商社あるいはシステムは、子供達の職業体験や観光の予約・申込み機能も持っている。親の納作業と子供の職業体験を同時に行うと、応援ポイント加算など地域応援や誘客、丹波地域への縁をもつきっかけづくりが多様に複合的に仕組まれている。子供達の様々な職業体験は、人材育成につながっていく。

⑩　多様なワークスタイルの創出　共有

TAMBA ブランド農産物に埋め尽くされた大区画の農地では、営農に必要な農業用水は AI が気温や日照時間などを分析して最適な水管理が行われ、都市部から丹波地域に移住してきた新規就農者のオペレーターはスーツ姿で出勤し、エアコンの効いた部屋でモニター監視を行いながらリモコン操作で農作業機械やドローンを巧みに操っている。また、消費者はパソコンのボタン操作一つで好みの食材を選択し、都市部に近い立地を生かした TAMBA ブランド農産物は新鮮なままその日の夕方の食卓に届けられている。

少し前の時代、丹波の農村地域は過疎化・高齢化・混住化が進行し、農業者だけでは農地の維持すら困難な状況に直面したが、農業者と地域住民の共同活動を推進する法制度を活用し、なんとか農地を維持してきた過去がある。

一方、地域住民との共同活動では地域の子供たちとの生き物観察会を継続的に開催するなどした結果、地域に古くから残る自然環境の保全や良好な景観の形成といった集落の健全性が次代への財産として引き継がれている。

一時期は農業に手一杯で生き物観察会や子供たちとのふれあいの場つくりが困難な時代も経験したが、先端技術を駆使した農作業の徹底した効率化を基盤とした当地域において、自然環境の保全と良好な景観のもと、地域全体が食の豊かさを享受できる暮らしを体感している。

⑦　ツーリズムの新展開

該当なし

⑧　製品・サービスの高付加価値化－世界市場との直結－

医療の進展等により、寝たきり生活や認知症がなくなるなど、健康寿命が大幅に延伸し、多くの人が１００歳まで生きられる「人生１００年時代」を迎えることとなった。

また、ＡＩやロボットの発達により、いくつになっても働くことが可能になるとともに、なにをするかというところを人間が決め、中間処理をすべてＡＩに任せることにより、自由時間が増加し、生活に余裕ができることにより、地域活動やボランティア、趣味等の余暇活動を好きなだけ楽しむことができることとなった。

ロボット等の活用により、農作業が全て自動化され、耕作放棄地がなくなるとともに、丹波の黒豆や枝豆、栗などの特産物の大量生産が可能となり、ドローンや自動運転飛行機の活用により、全国への出荷にとどまらず、海外にも大量輸出され、住民の所得が向上した。

また、丹波の特産品の美味しさを知った外国人が大量に丹波を訪れるとともに、自動翻訳機の活用等により、住民とのコミュニケーションが活発となり、国際交流のメッカとなった。

余暇活動時間の増加に伴い、シニア層がＩＴを活用し、長年培ってきた知識や経験を若者に伝える伝道者として活躍し、若者とシニア層のコミュニケーションが増加し、地域全体が活気に満ちた街となっている。

⑬　ソーシャル・インクルージョンの推進　共有

⑨　シリ丹バレー構想の推進－エコシステム創出、DX 化推進－

該当なし

⑩　多様なワークスタイルの創出

「働く」ことの意味が、「生活の糧を稼ぐ」から「自分のやりたいこと、得意なことをする⇒結果として対価を得る（得ない場合もある）」というふうに変わり、企業等への就職というよりも、自分の能力を活かす「しごと」を社会に提供するという形式になる。そのため、１日８時間を前提とする必要はなく、自分の思う時間だけ、細切れに「しごと」に使えるようになる。

必要とされる業務に対して、それを得意とする人が集まり対応する働き方が社会で一

般的になっている。基本的に得意な分野の「しごと」なので、効率もあがるし、精神的にも負担が少ないうえに、その分野の能力がさらに伸びるという好循環が生まれる。

一方、自動運転技術の進歩により、移動中も会議をしたり、睡眠を取ったりと自由に使うことができ、都市部と郡部の実質的な距離は縮まっている。そのため、人々が過ごす場所を選択する際には、純粋にその土地のもつ魅力や自分の好み（趣味に合うとか、休暇を過ごしたい場所等）で判断している。

そんな時代の丹波地域は、距離面のデメリットがなくなるため、豊かな自然や農産物（旬の美味しいものが味わえる等)、文化（休日は窯元で陶芸等）等を求める人々が「暮らす」地域となっている。(「暮らす」と書いたのは、「住む」という固定的に居を構えることだけを言うのではなく、短期・長期に「滞在する」人を含める趣旨。)

自然が好きな人が里山に入り手入れをすることで自然は守られ、農業に取り組みたい人が従事することで品種改良等が進み、よりブランド力があがるというように、地域に魅力を感じる人が集まり、そこに手が入ることで、より魅力が増すという好循環が生まれる。(この流れは他地域でも起こっているため、地域ごとに個性・特色が際立つ、“カラフル”な時代となる。)

このように人々は、自分の時間を、自分の好きなように、様々な活動に使いながら、充実して暮らしている。

③　集落保全の仕組み構築－未来へとつなぐ集落資産－　共有

⑪　多彩な食農人材の集積促進

該当なし

⑫　もりびとの育成・発掘

該当なし

⑬　ソーシャル・インクルージョンの推進－全員活躍社会の実現－

高齢者、障がい者は日常生活面で支援を必要とする場合がある。

一方で、心身機能の低下や制約により、他者へ支援を提供することが困難なことがある。つまり、支援を受けることが多く、支援する側にたつことが少ない。同じ痛みや悩みを体験した人がピアサポーターとして活躍する動きが今でもある。

しかし現時点では、支援を必要とする現地まで身体的に移動するか、一定程度の IT 活

用知識を持った人なら Zoom 等により遠隔地から WEB を通じて情報提供等行うことができるが、それらがかなわない人は活動への参加が難しい。しかし、高齢者や障がいのある人の経験、知識、考えは後生の財産である。

30 年後の丹波地域ではそれらをサンプリングして、必要とする人に AI が渡し届けるようになっている。誰かの力になりたいと思っている人がその人の脳の記憶を提供し、データ化（個人情報から一般化へ）することにより、様々な情報提供を行い活躍することができる。相互のニーズの一致にはまたもや AI がマッチングをはかる。利用する側は、欲する情報の提供を受けるだけでなく、他の人の脳のデータ化された記憶を映画のように追体験することもできる。提供する側はデータ化された自身の経験や知識を社会のために生かせる。

AI 技術と個人の経験や知識を結びつけることにより、30 年後の丹波では高齢であっても障がいがあっても活躍することが可能となっている。

自分らしさを追求できる社会が浸透し、様々な人が自信を持って暮らしている。

一昔前までは、女性は自分の意思で人生を決めることもままならなったと言うが、女性の政界進出も進み、今やどこの地域でも半分程度が女性？である。

女性？という性の捉え方をすることも減っているが、出生時の性で言えばということにしておく。

さらに、外国人の候補が自動翻訳機の力を借りて選挙演説をしている姿をみかける。議会といえどもオンラインで開催されているため、ベッドからでることのできない議員も自分の意見を発信している。たまに、高齢議員が昔はこうだったと言うが、孫世代の若い議員に諭されて、新しい技術を取り入れることになった。

LGBT の人も、自身の性を負担に感じることなく生活ができるようになり、学生服も自分が好むものを着用できるようになり、見ためが男性の子がスカートをはいている姿も見かけるようになった。就職活動の時は、自分が主張する性別で受験するのがあたりまえ。の社会となり、誰もが自由に生きやすくなった。

丹波は昔からひきこもり支援が充実していた。丹波篠山市の結に通っていたひきこもり経験者はプロゲーマーとして名を馳せ、誰もが気軽に立ち寄れるサードプレイスと自立相談室を開設し、地域への恩返しと言う。

障がいのある人や高齢者もパワーアシストスーツや自動運転、介助ロボットの流通で、多くの経験をもつアドバイザーとして重宝がられ、AI への情報提供に忙しい日々を送っている。

丹波はスローライフ及び自給自足できる地域をめざす。

子どもたちが丹波で暮らし続けようという意識を醸成するため、丹波ネット高校や大学・専門学校を設立し、丹波に居ながらも県内だけでなく、国内、海外ともオンラインでつながり、学びたいことを学べる環境を整える。

高校や大学などでは、環境や農業など専門性の高い技術を習得できる体験を多く取り入れ、丹波に根ざす人材育成につなげる。体験を通し、共通の関心や課題を持った若者が集うことで、若者のフロンティアが生まれ、数多くのコミュニティが形成される。また、若者が主体となり、地域の高齢者とタッグを組むことで将来の丹波を支える強固な土台が構築される。そのコミュニティは現在の自治体という枠を超え、「農業に特化した地区」「食に特化した地区」など、特色を生かした地域として発信していく。

その結果、テレワークで田舎暮らしを楽しむ人、本格的に農に参入する人など、それぞれのニーズに合った暮らしを求めた都市からの移住者が増える。また、その移住者と交流する中で、新たなコミュニティが生まれたり、さらにコミュニティが進化したりする。

⑮　グローバル教育、国際理解教育の実践－世界との連携－

⑰　関係人口の拡大＋移住・環流の促進　　共有

⑧　製品・サービスの高付加価値化－世界市場との直結－　共有

⑭　創造都市・創造農村の形成－文化の発信力強化－

⑤　未来都市の創造　共有

⑮　グルーバル教育、国際理解教育の実践－世界との連携－

丹波の森大学と連携した「丹波版 CCRC」と呼ばれるこの地域では、丹波の森公苑にシニアと学生の笑い声が聞こえてくる。丹波の森公苑内の芝生広場ではシニア学生と現役学生が企画したイベントに近隣の幼稚園児が集まって、ドローンを飛ばしている。ドローンの操作を教えているのは、都市部からの移住者で元はエンジニアだ。また、森公苑のセミナールームでは、地元の小学生と丹波を拠点にまちづくり活動に取組む大学生がオンラインで交流している。

「丹波版 CCRC」では健康な時から地域の空き家をリノベーションした“シェアハウス”に住み、介護になっても移転することなく継続的なケアが保証されている。居住者の健康管理のために、県立丹波医療センターと連携した健康ビッグデータ解析、予防医療、食事がプログラム化されているだけでなく、丹波の森大学と連携した生涯学習、地

域におけるスポットでのしごとや自治会活動への参画などが緻密に組み込まれている。
　これにより、多くの雇用が発生し、以前から地域の課題となっていた高校卒業した若者が地元から流出することはなくなった。
　丹波版 CCRC は日本版 CCRC の受け売りではなく、国籍に関係なく、多世代が集い、学び、働き、住まう。居住する人の健康寿命が伸び、地域の担い手となり、丹波の森全体を丹波の森大学のキャンパスに見立てた地域は生き生きと輝き、安心して暮らしている。

⑬　ソーシャル・インクルージョンの推進－全員活躍型社会の実現－　共有

⑯　キッズ・ファーストプログラムの展開

該当なし

⑰　関係人口の拡大＋移住・環流の促進

⑬　ソーシャル・インクルージョンの推進－全員活躍型社会の実現－　共有

⑱　次世代コミュニティの形成

　かつて日本でも人口減少を生活のスタイルや価値観を大きく変えることで乗り切った時代があった。
人口減少は、数十年は減り続ける予想が出ている。現在のように移住を奨励し進める施策では、かえって地方税の負担が重くなるだけである。その対策としては、地域資源循環型システムの構築と車社会の見直しである。
　地域資源を保護し、自分たちが持っている生産できるものを地域内で循環させる。人も生産物もエネルギーも文化も地域で得られる資源で循環させるような仕組みを作り、一般車両の入らない範囲を作り、人がゆっくりと歩いて買い物ができるようにする。そこで、地域で生産されたものの売り買いをし、人や環境に優しい地域の特色ある小さな共同体を日本各地に形成する。国はそこに人が流れるように支援する体制を作る。
　交流の原点は、昭和世代の私たちにとっては地域のおばちゃんやおじちゃんが店先で大きな声を張り上げて物を売り、お母さんが話しながら物が手から手へと渡る光景だ。今の子どもたちはそんな体験をすることはないし、できない。人の交流は日常から始まるということを子どもたちが理解できる状況ではない。子どもたちは交流を知らない。
　エネルギーは風や太陽、水の流れで作り出すことができる。

お金は暮らせるだけあれば案外幸せだということを、今の若い世代のほうが私たちより知っているかもしれない。学ぼう。 私たちは今ある大切な資源を子どもたちに残し、子どもたちが生涯親世代の責任を負うために地獄を見る生活を送らせないようにしてくべきではないだろうか。 人は良心と幸せになりたい思いを持っている。 子どもを大切に育て、目上を敬う。そして、将来の日本を素直な良心で考える。 そんな大人や政治家が増えることを願っている。 私たち大人が現況に目をつぶり危機感だけを煽り、具体的な対策を行わない政治家に任せている責任は、子どもたちが生涯背負うことになる。 30 年後はすぐそこだ。
⑤　未来都市の創造　共有

丹波の森宣言

昭和 63 年 8 月、住民代表による「100 人委員会」を組織し、「丹波の森宣言」が起草され、1000 人大会で満場一致で決議されました。

この丹波の森宣言は、丹波地域全世帯と企業に配布され 21,616 世帯の同意署名を得て採択されました。

（公財）兵庫丹波の森協会 HP より

丹波の森構想

丹波地域の美しい自然、暮らし、なりわい、人々の交流、生活空間、生活文化など住民を取り巻くすべての環境を「丹波の森」と位置づけ、丹波の森宣言で示された丹波も森づくり（地域づくり）の理念を具体化するため、住民や活動団体、行政等が一体となって、人と自然と文化の調和した地域づくりを推進していくための取組指針として策定されました。

丹波の森宣言を実現する指針として提案されたのが「丹波の森構想」（'89 年 3 月策定）です。

（公財）兵庫丹波の森協会 HP より

みんなで丹波の森

成長しつづける丹波の夢ビジョン―「森の市民」をめざして―（平成 13 年 2 月策定）

21 世紀を見通した兵庫県長期総合計画として策定された「兵庫 2001 年計画」の計画期間が満了するにあたり兵庫の新しい羅針盤として、すべての人や地域が共有できる「夢」として、新しい長期ビジョンを策定した。

ものの豊かさを享受していた成長の時代から、社会の構成員としての責任を果たしていく成熟の時代を迎え、従来のような人口増加や経済成長を前提とする計画が成り立たなくなったため、地域住民が自ら「夢」を描き、自らがその実現に取り組むという県民主役、地域主導、地域資源や社会基盤の活用を重視するビジョンとしてまとめた。

1　取組姿勢（基本理念）

丹波の魅力を創造するためには、丹波のいのち（＝自然）、ひと（＝人間）、なりわい（＝産業）をはぐくむ（「守り」「育て」「活かす」）と同時に、３つの「環」が持つ意味を考え、行動することが大事です。

○いのちをはぐくむ・自然の環

「丹波の森」では、動物も植物もあらゆる生き物が、太古の昔から回り続けてきた大きな自然環境の中で、「いのち」の循環という「環」を先祖から受け継ぎ、子孫に引き継いできました。しかし、近年その一部が損なわれ、野生動物との新たな共生のあり方を問い直す必要が生じています。人間も自然界の一員であることを正しく認識し、自然や人への思いやりのこころ持って行動することが求められています。

○ひとをはぐくむ・人間の環

地域内外の人々が手を携え、つながっていくことが、丹波の森づくりの大きな原動力となります。

一人でできることから始め、立場が違うさまざまな人々が一緒に汗をかくことが継続した丹波（ふるさと）づくりにつながります。こうした活動が地域づくりのネットワークを拡げます。

○なりわいをはぐくむ・産業の環

産業については、それぞれの分野で完結するのでなく、農業や林業、商業、工業などの分野を越え、また、地域を越えて生産・加工・流通過程でつながるなど多様な関係を構築することが丹波の産業の活力にとって重要です。

さらに、ネットワークを広げていくためには、IT などの新しい動きや世界の動きにも目を向けていくことが必要です。

2 将来像

丹波の魅力をみんなの共有の財産として守り、育て、活かしていく。

丹波にかかわる「丹波フアン」と一緒に作っていく、一層高めていきたいと願う丹波の魅力を将来像とした。

○都会に近い田舎

豊かな自然の中で暮らしていける都会に近い田舎として、丹波地域内外の人々や外国との交流が活発にできる

○多世代が支え合う豊かなコミュニティ

子ども・若者から高齢者まで各世代や男女、障害者、外国人住民などみんなが参加し、支え合い、助け合うこころ豊かなコミュニティがある。子どもが豊かな自然や多彩な人々との関わりの中でこころ豊かなに育てられている。

○丹波のことは自分たちで決める仕組み

自分たちの地域のことは自分たちで決めて実行できる仕組みがある。みんなの合意で丹波らしいルールをつくることができる。

○幅広い働き方・いろいろな職種・手応えを感じる社会活動

いろいろな職種を選べる、働き方を選べる、仲間を増やして活発な社会活動ができる。丹波の自然の恵みや伝統・文化、魅力を生かし、農林業や商工業のネットワークが広がる産業がはぐくまれる

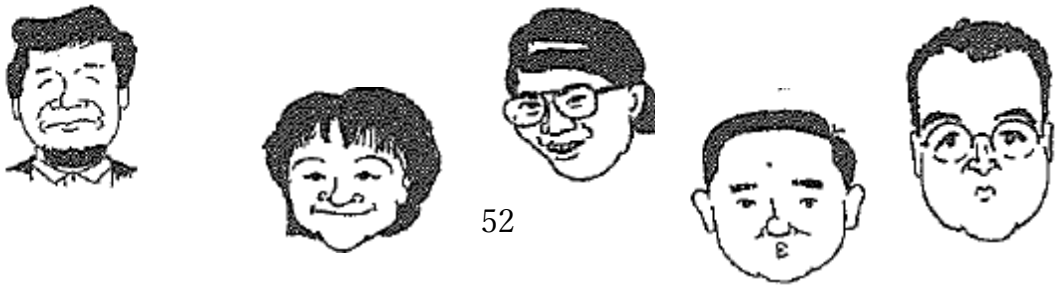
○無意識のうちにつくられているバリアがない地域

意図せずつくられているバリア（＝物理的・心理的障壁）がなく、心穏やかに安心して暮らせる真のバリアフリー社会

3 策定の経緯

丹波の夢ビジョンは、丹波地域を愛し、幅広く地域づくり活動を展開している自然環境、国際交流、福祉や産業分野などの実践活動家 18 名と学識経験者 3 名を公募と推薦により選ばれた「丹波の森夢 21 委員会」（座長：中瀬勲教授）を設置し、多くの皆さんからいただいた意見・提案をもとに住民自らが主体的に取り組むことを基本に 21 委員会がとりまとめた。

とりまとめにあたっては、夢ビジョンの草案づくりを行う「起草委員会」と住民の意見を幅広く求めるための夢会議を企画・実施する「企画委員会」の 2 つの委員会を設け、行政による夢ビジョン検討プロジェクトチームと協力しながら取り組んだ。



みんなで丹波の森

成長しつづける丹波の夢ビジョン改訂版（平成 23 年 10 月策定）

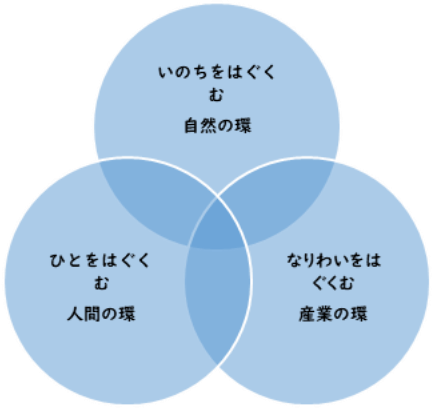
長期ビジョンの策定から 10 年が経過し、想定した目標年次の中間年を過ぎたことを期に改訂した。

人口減少、少子高齢化の進展といった社会潮流の変化を踏まえながら、地域住民、関係団体の皆さんから寄せられた意見や平成 21 年 3 月にまとめられた丹波の森構想の評価・検証報告をもとに、現行地域ビジョン点検・評価し、30 年後の 2040 年を展望しつつ、2020 年の地域の姿を想定した丹波地域ビジョン改訂版を策定した。

1　取組姿勢（基本理念）

当初ビジョンでは、「森の市民」になることを提唱していますが、丹波の森構想の評価検証報告（平成 21 年 3 月）においても、「もりびとになって　たんばらしさを楽しもう」という提言で、「もりびと」（“もり”には、「森」「守」「盛」の意味を込め、丹波の森を守り盛んにすることを目指す）という同様の考え方が提唱されています。

また、当初ビジョンでは、提唱された『３つの環』の取組姿勢を引き継ぎ、基本としながら、丹波地域とはじめとした住民、団体、企業、行政等が連携し、主体的に取組を進めていくことにより、丹波地域ビジョンの掲げる５つの将来像の実現を目指します。



丹波（ふるさと）をはぐくむ３つの「環」

○シンボルプロジェクトの展開

丹波地域ビジョン委員会では、平成 18 年度から、住民と行政の参画と協働をより一層推進していくため、地域住民や団体が行政との連携を推進する象徴的なプロジェクトとして、『たんば田舎暮らし支援プロジェクト』をシンボルプロジェクトとして設定し、田舎暮らし案内所の開設、田舎暮らしフォーラムの開催、交流イベントの実施に取り組んだ。

さらに、企業と連携した森・里づくりや大学との連携による商店街の活性化等の地域づくり、歴史的・文化的つながりをもつ京都丹波との「大丹波」連携、農産物の都市部での販売や県民交流広場を活用した都市との交流など、連携・交流の輪が広がっている。

こうした状況を踏まえて、これまで取り組んできた「たんば田舎暮らし支援プロジェクト」は発展させ、シンボルプロジェクトを『たんばを楽しむ連携・交流プロジェクト』と設定し、住民と行政が協力して取組を進めた。

2 将来像

５つの将来像を実現していくために、丹波地域の住民、団体、企業、行政が地域ビジョンの理念等を共有し、主体的に取組を進めた。

丹波地域が持つ魅力のある資源を最大限活用し、さらに丹波地域の魅力を創造していくための取組みの方向を、丹波の森夢会議や地域ビジョン検討委員会の議論をもとに５つの将来像を示した。

○みんなで創る“自立のたんば”

①地域の魅力発掘と情報発信　②地域を担う人材の育成
③地域づくりへの住民参加の推進　④地域で活動する団体の連携推進

○都会に近い田舎を楽しむ“交流のたんば”

①森・川・里の豊かな自然の保全と活用　②環境に優しい地域づくりの推進
③環境学習フィールドづくり　④美しい景観づくりの推進
⑤都市との多彩な交流の推進　⑥丹波の田舎暮らし情報の発信

○やりがいを実感できる“元気なたんば”

①地域の産業とリードする農林業の振興　②商店街の活性化･ものづくり産業の振興　③丹波の魅力を活かしたツーリズムの推進　④地域の資源を活かした「しごと」の創出　⑤地域づくり活動・文化活動の推進　⑥若者の就労促進

○多世代が支え合う“絆のたんば”

①地域コミュニティの再生　②地域ぐるみでの子育て推進
③高齢者が安心して暮らせる地域づくり　④高齢者が活躍できる地域づくり

○ともに暮らす“安全安心なたんば”

①誰もが暮らしやすいユニバーサル社会の実現　②障害のある人も外国人も共に暮らす地域社会の実現　③医療や健康、食の安全が確保された安心な地域の実現
④災害に強く、犯罪のない地域づくりの推進

3 策定の経緯

当初の丹波地域ビジョン策定からの時代潮流（解決すべき課題等）の変化等を踏まえながら、ビジョンの点検・見直しを行い、将来像や地域づくりの方向性等について検討する丹波地域ビジョン検討委員会（検証委員長：中瀬勲丹波の森公苑長）を設置し、平成２１年から２２年にかけ、複数回の検討委員会を開催。

検討委員会は、地域住民（過去のビジョン委員等１２名）が中心となり、15 名でなる。